

ナ イ ト ウ オ ッ チ ャ ー

## 登場人物

---

### ○武者英雄

31歳。空き巣専門の泥棒。かつて社会人として働いたことはあるものの、人間関係の構築が苦手なためドロップアウト。身長170センチ、体重60キロ。髪はだらしなく伸びているが、髭や身だしなみは整えようという意志がある。裸眼。服装は概ね、マウンテンパーカーにカーゴパンツ、バックパック。

### ○渡辺義之

32歳。フリーの映像作家。東京の番組制作会社での勤務経験あり。身長175センチ（武者より少し大きい）、体重65キロ。短髪、メガネ、無精髭。服装は概ね、ダウンジャケットにジーンズ、ボストンバッグ。

### ○新妻果野

25歳。デリヘル嬢。ブラウンの長髪。身長150センチ。服装は概ね、レザーのライダースジャケットにスキニーパンツ、赤いハイヒール、大きなショルダーバッグ。

### ○三井功一郎

35歳。アパレルショップ経営。盗品の売買や委託・仲介等も行っている。身長175センチ、体重60キロ。髪は肩までのワンレン。服装は、ザ・ジャムの頃のポール・ウェラーみたいなセンス。

### ○新妻長二郎

75歳。果野の祖父。

### ○板倉一郎

65歳。長二郎のかつての仕事仲間。

### ○高橋司

29歳。果野の恋人。身長188センチ体重90キロ。空手2段。パーカーやトレーナーの上に上着は着ない。

### ○カオリ

25歳。果野の同僚。髪型は黒のボブ。身長150センチ（果野と同じくらいの身長）。服装は概ね、ダッフルコートにミニスカート、ブーツ、ショルダーバッグ。

### ○石盤

直径約15センチ、厚さ約5センチ。中は空洞。菊の紋のように、中央にはかつて石がはまっていたような円形の台座、そこから放射状に筋が伸びている。

#### ○ナイトウォッチャー

石盤を持つ者を守る守護者。身長約2メートル、ヒト型、全身真っ黒、常人離れした大きな2つの目を持つ。怪力。

## あらすじ

---

舞台は名古屋。12月。空き巣専門の泥棒として細々と生計を立てている武者は、映像作家・渡辺に密着取材されていた。盗品の仲買人・三井の依頼により、デリヘル嬢・果野の部屋に侵入した武者は、目的の石盤を見つけるが、暗闇に現れたナイトウォッチャーに驚き、仕事を完遂できずに部屋を逃げ出す。そのことを三井に叱責された武者は、改めて果野の部屋へと赴く。

果野の部屋を監視中、嫌がる果野につきまとう恋人・高橋とその後輩2人が、果野を守護するナイトウォッチャーに痛めつけられる様子を、武者と渡辺は目の当たりにする。その喧噪の際に、今度はナイトウォッチャーに見つめられながらも石盤を盗み出すことに成功した武者は、石盤を調べているうちに、果野に替わってナイトウォッチャーに守護される者になってしまう。武者から石盤を奪いにやってきた三井を、ナイトウォッチャーは痛めつける。

武者と渡辺はことを真相を探るべく、名古屋郊外の果野の実家へと赴く。果野や果野の祖父と出会い、武者と渡辺は石盤とナイトウォッチャーの仕組みを知る。その頃、石盤を手に入れた三井は、渡辺が残していったビデオカメラの映像から石盤の力を知り、それを我がものとする。三井の元に石盤を受け取りにきた依頼人・板倉やそのボディガードは、三井を守護するナイトウォッチャーによって退散させられる。

すっかり消沈していた武者だが、石盤を果野の元へ帰すために三井と対峙することを決意する。三井の経営するアパレルショップに侵入した武者は、石盤を奪ったものの、警察に逮捕される。

窃盗の罪で服役した武者は出所し、渡辺、そして果野に再会する。

## 第1章：取材（1）

---

### ○武者のアパート・リビング（夜）

渡辺のビデオカメラの映像。

カメラはベランダ側から部屋の中へ向いている（以下、このカメラ位置をポイント1とする）。

部屋の大きさは1DK。

リビング（6帖）とその奥のダイニングキッチン（6帖）が見える。

ダイニングキッチンとリビングの境のガラス障子は開いている。

調理台の横に玄関戸がある。

リビングには、カメラから向かって左の壁際にベッドとスチール棚が置かれている。

スチール棚には、本やマンガが数冊、DVDが数本、小物類、ビデオカメラのに入った未開封の箱、衣類。

武者、床にあぐらをかき、テーブル越しに渡辺のセッティングするカメラを見つめる。

室内なのにマウンテンパーカーを着ている。

武者「顔は、どうすればいいんですか」

渡辺「いいですよ、そのままです。後でモザイクかけるんで」

カメラを見つめる武者。

渡辺はカメラの裏にいて見えない。

渡辺「はい、OKです」

カメラの位置が決まった様子。

渡辺「一旦エアコン切りますね」

ピ、という音がしてエアコンがオフになる。

渡辺「では武者さん、持ち物の説明をお願いします」

武者、30リットルサイズのザックをテーブルに乗せ、口紐を緩める。

中から水、タオル、と取り出し、テーブルに置いていく。

渡辺「あの、物がなにかを言いながら出してもらっていいですか」

武者、少し戸惑った様子で、

武者「えっと、水です。それとタオル」

次にランタン型の電灯を取り出す。

武者「懐中電灯ですね」

渡辺「普通の懐中電灯じゃありませんね」

武者「普通の懐中電灯もありますよ」

と、ポケットからペンライトを取り出す。

武者「あとは……」

と、ザックの中を探る。

武者「予備の電池」

と、予備の電池を出す。

黙ってソイジョイを2本出す。

渡辺「それは？」

武者「（少し考えて）お腹が空いたときに」

続いて正露丸を出す。

渡辺「それは？」

武者「（少し考えて）お腹が痛くなったときに」

続いて折り畳み傘を出す。

渡辺「それはどうやって使うんですか」

武者「いや、（少し考えて）帰りに雨に降られたら困るから」

× × ×

武者、テーブルに出した物をザックにしまう。

渡辺「工具とか持ってかないんですか。ペンチとか、ハンマーとか」

武者「ああ（と考えて）、使わないですね」

武者、ザックの口を締める。

渡辺「あれは？ あの、鍵を開ける道具で、あの（と身振りで説明している様子）」

武者「ああ、針金2本で」

渡辺「はいはい、それ」

武者「ぼく、あれヘタクソなんです。他にも、バンプキーってのがあるんですけど」

渡辺「ああ、聞いたことがあります」

武者「一応持ってはいるんですけど。あんまり精度が良なくて。ほとんど使わないですね」

武者、寒さに身を固め、渡辺の次の質問を待つ。

武者「まあ、実際見てみないと判んないですよ」

渡辺「そうなんです。そんな装備で空き巣なんてできるのかなって」

× × ×

渡辺「同行させてもらう上で、気をつけることはありますか」

武者「（暫く考えて）なんかあったら、走って逃げる」

○マンションA・道端（昼）

渡辺の手持ちカメラの映像。

数十メートル離れたマンションA（3階建、総戸数18）の玄関側の壁面を遠景で撮る。

× × ×

渡辺の隣に、スーツにネクタイ、マスク姿の武者がザックを背負って立っている。  
カメラ付きメガネをかけている武者は、寒さに震えている。

渡辺「隠れたりしないでいいんですか」

武者「意外に隠れるところないですよ」

渡辺「怪しくないですか」

武者「（微笑みながら）渡辺さんのほうが怪しいですよ」

× × ×

武者、カメラ付きメガネを指差しながら、

武者「もうこれ撮ってるんですか」

渡辺「いや、その、横のボタンを押すと録画開始です」

武者「これ？」

と、ツルの側面にあるボタンを押す。

○同・道端

武者のメガネカメラの映像。

ビデオカメラを持つ渡辺が武者のメガネを見ている。

渡辺「いま撮ってます」

× × ×

武者「じゃあ、いってきます」

と、渡辺をその場に残し、マンションAへと歩いていく。

○同・外階段

武者のメガネカメラの映像。

武者、階段を上がる。

○同・道端

渡辺の手持ちカメラの映像。

3階の外廊下を進む武者。

○同・外廊下

武者のメガネカメラの映像。

武者、目的の部屋の玄関の前までやってくる。

ガスメーターの配管に取り付けられた4桁のダイヤルキー付きのキーボックスを手にする

。

ダイヤルを一つずつ回して解錠を試みる。

十数回目で解錠し、中から鍵を取り出す。

武者「（小さな声で）では、入ります」

#### ○同・道端

渡辺の手持ちカメラ映像。

ドアが開き、部屋の中へと消えていく武者。

#### ○同・室内

武者のメガネカメラの映像。

玄関、スニーカーやブーツが雑多に置かれ、衣装持ちの男性の部屋であることが示唆される。

武者、玄関でスニーカーを脱ぎ、侵入する。

部屋の間取りは1LDK。

廊下をユニットバスの前を通って進むと、対面式のキッチンへ出る。

カウンターの向こうのリビングは約12帖と広い。

カーテンが引かれていて薄暗い。

武者、リビングに侵入し、物色を始める。

テレビボードの上に40インチの液晶テレビ。

武者、テレビボードの中のCD、DVDを品定めし、元の位置に戻す。

反対側の壁にソファ、男性物のパーカーやジーパンが置かれている。

その前に置かれたガラス天板のテーブルの上に、雑誌やノートパソコン、明細や書類が雑多に散らばっている。

その中にガラスの灰皿があり、中に5千円札1枚、千円札1枚、小銭が入れられている。

武者、小銭も含めてそのお金を取り、ポケットへしまう。

武者、衣装棚を開ける。

スーツやコート、レザージャケット等の衣装が詰めて掛けられている。

上段にギターケースと小物入れが見える。

小物入れを下ろし、中を探る。

ドクロの指輪とシルバーのウォレットチェーンを取り、ザックへしまう。

小物入れを元の位置に戻す。

掛けられた服のポケットの中を探る。

無地のジッポのライターが出てくる。

ザックへしまう。



× × ×

武者、しばらく立ち尽くし、部屋の中を見回す。

ソファの横に置かれたアコースティック・ギターに目が留まる。

近づき、よく眺めてみる。

武者「（小さな声で）どうしよっかな」

× × ×

武者、ギターを盗もうかまだ悩んでいる。

武者「（小さな声で）やめておこう」

翻って、リビングを出る武者。

玄関までやってきて、耳を澄ます。

カメラ付きメガネを一旦外し、ドアスコープを覗く。

カメラ付きメガネをかけ、ドアを開ける。

鍵をかけ、キーボックスにしまい、元の配管に引っ掛ける。

○同・道端

渡辺の手持ちカメラの映像。

マンションAの階段を下り、渡辺に近づいてくる武者。

武者「行きましょう」

足早に立ち去る武者。

そのあとを追う渡辺。

○武者のアパート・リビング（夜）

同日。

ポイント1のカメラの映像。

渡辺はカメラの裏にいて見えない。

武者、スーツ姿のままあぐらをかき、小銭を数えている。

テーブルには今日の戦利品の他、発泡酒が置かれている。

武者「6千と、557円ですね」

渡辺「それ（指輪、ウォレットチェーン、ライター）はいくらくらいになるんですか」

武者「（少し考えて）合わせて1万くらいじゃないですかね」

武者、発泡酒を一口含む。

渡辺「今日の成果としては、どうですか」

武者「（テーブルの上を見回し）まあ、いいほうじゃないですかね」

武者、うんうんと頷き、成果に満足している様子。

× × ×

渡辺「あのギターは？」

武者「あれ、多分30万くらいするやつなんですよ」

渡辺「30万？」

武者、発泡酒を飲みながら、そうそう、と頷く。

武者「あ、店頭価格がですよ」

渡辺「売ったらいくらくらい」

武者「（少し考えて）5万くらいかな。もうちょっとするかな」

渡辺「（がっかりして）そうですか」

武者「行って8万ですね」

渡辺「シリアルナンバーとかですか」

武者、質問の意図が判らず、無反応。

渡辺「盗まなかったのは」

武者「シリアルナンバー？」

渡辺「シリアルナンバーから足がつくからとか、そういう理由で盗まなかったんじゃないんですか」

武者「いやいや（馬鹿にしたような薄笑い）、単純に大きすぎるでしょ」

× × ×

マウンテンパーカーに着替えて、発泡酒を飲む武者。

渡辺「仕事をする上で気をつけてることってありますか」

武者「気をつけてること……（テーブルをみつめる）。見切り発車しないってことですかね。怪しいなと思ったらやめとくとか」

渡辺「怪しい、怪しくない、ってどうやって見極めるんですか」

武者「そりゃあもう、調査ですね」

渡辺「調査」

武者「はい。身辺調査ですね。独りで住んでるかとか、留守の時間帯とか」

渡辺「やっぱり独り暮らしがいいんですか」

武者「んん、やっぱそうですね。2人以上になると、単純に留守の時間帯が短くなるし、それを調べるのにも時間かかるし」

渡辺「ここら辺は学生が多く住んでますよね。大抵独り暮らしですよ」

武者「学生は駄目なんです。あいつら生活が不規則だから。やっぱり単身で勤めに出てる人がいいですね」

× × ×

渡辺「失敗談とかありますか？」

武者「んん、今んとこ致命的なのはないんです。幸い」

渡辺「部屋に入ってみたら思惑と違ったとか」

武者「んん……（半笑いで）少し前に、独り暮らしかと思って部屋に入ったら、寝たきりのおじいちゃんが寝てたことがありますね。あれはびっくりしましたね」

渡辺「で、どうしたんですか」

武者「寝てたんで。普通に物色して、出ました」

渡辺「調査では判らないこともあると」

武者「普通はそういう家は、介護の人とかが出入りするもんですけど、そこはそういうのを使ってなかったみたいで」

渡辺「そこではいくら稼いだんですか」

武者「（少し考えて）何百円だったと思いますけど。千円はいかなかったと思います」

× × ×

渡辺「大体、月の稼ぎはいくらくらい」

武者「（少し考えて）10万前後ってところですかね」

渡辺「多いときだと」

武者「多いときだと（少し考えて）、20万稼いだときがありましたけどね」

渡辺「（そんなものか、という風に）20万」

武者、そうそう、という風に頷く。

渡辺「生活できますか」

武者「（ばつが悪そうに）まあ、この通り」

× × ×

武者「まあ、そんなに贅沢しないし」

渡辺「物も基本、少ないですよ」

武者「そうですね（と自分の部屋を見回す）」

渡辺「普段は何をしてるんですか」

武者「普段」

渡辺「お休みの日とか」

武者「休みは基本、ありませんよ。毎日仕事してます」

渡辺「余暇ですよ。趣味とか」

武者「趣味は、特にありませんね」

渡辺「DVD見たりとかですか」

武者、渡辺が指差した棚のDVDを見遣る。

武者「（言い辛そうに）DVD、見れない」

渡辺「あ、そういえばテレビがないですね」

武者「テレビ、ないんですよ」

渡辺「テレビないとキツくないですか」

武者「いや、ないならないで、平気ですよ」

渡辺「（変わった人もいるもんだ、という風に）へー」

武者「慣れですね」

渡辺「そうですか。番組作ってた身としては辛いですね」

渡辺、少し考えて、

渡辺「じゃあ、何でDVD」

武者「まとめて売りにいくんで」

渡辺「あ、盗んだやつですか」

武者、そうそう、いう風に頷く。

渡辺「その隣のビデオカメラも寝かしてあるんですか」

と、スチール棚のビデオカメラの箱を指差す。

武者「あれは」

と、話すか話すまいか逡巡して、

武者「ぼくも昔、映画とかそういうのに興味があって。念のためにとってあるんです。いつかお金が貯まったら、パソコンとか買って、いろいろできたらいいなって」

渡辺「いろいろって」

武者「（考えた末）何かできたらいいなって」

渡辺「ところで、あれは何ですか」

と、スチール棚に立てかけてあるティーボール用の金属バットを指差す。

武者、振り返る。

武者「バットです」

渡辺「野球部だったんですか」

武者「（まさか、という風に）いえいえ」

渡辺「あれも盗んだやつですか」

盗んだやつ、と平然と口にする渡辺に牽制する視線を送る武者。

武者「護身用に買いました」

渡辺「護身用？」

武者「うちに変な奴が来たとき用に」

渡辺「（笑う）泥棒なのに」

武者、渡辺に牽制する視線を送る。

× × ×

武者「どんな番組作ってたんですか」

渡辺「どんなって（少し考えて）、グルメレポとか、イベントレポとか」

武者「芸能人に会ったりするんですか」

渡辺「会いますよ」

武者「例えば？」

渡辺「クリストファー・ウォーケンに会ったときは感動しましたね」

武者「（羨ましさを隠し）へー」

渡辺「1回だけ海外行ったことがあって」

武者「（無感動を装い）へー、いーなー」

渡辺「1回だけですよ」

武者「海外かー」

渡辺「ひどいところにも連れて行かれるんですよ」

武者、興味のある振りをして相槌を打つ。

渡辺「（思い出し笑いしながら）昔、心霊関係の番組で長野県に行って。山の中で雪が降ってて（武者が関心をなくしていることに気付く）。あれはひどかったなー」

武者「何で辞めたんですか」

渡辺「（笑いながら）そんなだからですよ。山の中で凍死しそうになるからです」

× × ×

構想中の映画について熱弁を振るう渡辺。

渡辺「『オーシャンズ11』みたいな感じにしたいんですよ。でも日本で、銀行を襲うとか、宝石盗むとか、リアリティもないしそんなバジェットの企画通るわけないので」

興味なさげに相槌を打つ武者。

武者「ぼくなんか取材して参考になりますか。その、撮ろうとしてる映画の」

渡辺「（答えに窮し）まだ1日目なんでねー」

気まずい間が空き、渡辺は話題を変える。

渡辺「『武者』って珍しい名前ですよ。『武者修行』の武者」

武者、頷く。

渡辺「どこ出身なんですか」

武者「ぼくは愛知県なんですけど、父が宮城です」

渡辺「そっちでは多いんですか、武者って名字は」

武者「さあ、どうなのでしょうね」

渡辺「聞いたことないんですか、お父さんに」

武者「（素っ気なく）はい」

× × ×

武者「あの、ぼく、もう寝ますんで」

渡辺「あ、そうですか。じゃあ、今日はこれで」

渡辺、ビデオをオフにする。

## 第2章：取材（2）

---

### ○駅のロータリー（朝）

渡辺の手持ちカメラの映像。

夜が明け切っておらず、まだ薄暗い。

ロータリーの一角で、マウンテンパーカー姿で立って待つ武者。

渡辺、小走りで近寄る。

武者「おはようございます」

渡辺「ごめんなさい。遅くなって」

武者「じゃあ、いきましようか」

### ○住宅街・交差点（朝）

渡辺の手持ちカメラの映像。

武者、立ち止まり、ザックから黄色のビブスを2枚出す。

武者「じゃあ、これ着て下さい」

渡辺「これ、何ですか」

武者「（改めてビブスを広げ）何だろう」

× × ×

道端に立ち、挨拶推進運動を装う武者と渡辺。

武者「（独り言のように）おはようございまーす」

駅に向かって、サラリーマンや学生が徒歩や自転車で通り過ぎていく。

武者「（独り言のように）おはようございまーす」

渡辺、通行人がいなくなった隙に武者に尋ねる。

渡辺「これは何ですか」

武者「（真面目に）挨拶推進運動家です」

なんてね、という風に武者の表情が崩れる。

武者「あそこ」

と、少し離れたところにあるマンションを指差す。

武者「あれ、単身者用のマンションなんですよ」

マンションの部屋のうちの一つからスーツ姿の男性が出てくる。

武者、足元に置いてあったザックからノートを取り出し、時間を書き込む。

× × ×

マンションの別の部屋から若い女性が出てくる。

武者、ノートに時間を記入。

若い女性の乗った自転車が駐輪場から出てくる。

武者、自転車の色や特徴（折り畳み、カゴ（付き）、Tハン（ドル）等）を記入。

通行人が武者の横を歩いていく。

渡辺「これ、目立ちませんか」

武者「いま、ここで挨拶してて、返事返してくれた人いました？」

渡辺「（少し考えて）いや」

武者、でしょ？ という表情をして、

武者「誰もぼくたちのことなんか覚えてませんよ」

× × ×

小学5年生の女の子が通り過ぎる。

女の子「おはようございまーす」

武者「（慌てて）おはようございます」

#### ○商業地域・道端（昼）

渡辺の手持ちカメラの映像。

ある小さな不動産屋の、通りを挟んだ向かいの歩道に立つ武者と渡辺。

武者「あそこは不動産以外にも、パソコンの出張修理とかやってて、留守にしたり、人の出入りが激しいんですね。なので、鍵はどこかに隠してあると思います」

渡辺「不動産屋って、結構な金額があるんじゃないんですか」

武者「大した金額じゃないですよ。大体一回分の契約金とか、あってもその程度ですね。すぐ銀行に預けちゃうんで」

渡辺「金庫とかに保管してないんですか」

武者「金庫だと思いますよ」

渡辺「金庫、開けられるんですか」

武者「まあ、入ってみなくちゃ判んないけど、金庫って、結構面倒臭くて、開けっ放しにしてるところ結構あるんですよ。番号忘れないようにメモしてたりとか」

不動産屋の前に、パソコン修理業者の軽ワゴンが泊まる。

若い男性が降りてきて、事務所のドアを開けようとするが、閉まっている。

若い男性は事務所の裏へと歩いていく。

暫くして事務所のドアが中から開き、さっきの若い男性が出てくる。

武者「行きましょう」

見るべきものは見た、という風に、武者は歩き出す。

#### ○古着屋・店内（昼）



渡辺の手持ちカメラの映像。

渡辺、買い物客のふりをして、昨日の戦利品を売却する武者を撮る。

渡辺から10メートルくらい離れた買取カウンターに腰掛ける武者。

若い女性店員に買取システムの説明を受けている。

武者、女性店員に書類を渡され、記入する。

番号札を渡され、席を立つ武者。

武者、渡辺とは離れて、一人店内の商品を見て回る。

女性店員、カウンターの向こうでベテランの男性店員と何やら話している。

女性店員、話しながら武者の方を指差す。

武者、それをちらっと見るが、気にした様子もなく店内を見て回る。

× × ×

女性店員（アナウンス）「番号札8番、番号札8番でお待ちのお客様、計算が終了致しましたので、買取カウンターまでお越し下さい」

カウンターへ向かう武者。

× × ×

武者、男性店員の方から説明を受け、お金を受け取る。

書類にサインをし、席を立つ。

男性店員「ありがとうございました」

武者、店を出る。

#### ○同・道端

渡辺の手持ちカメラの映像。

渡辺、早足で武者に追いつき、並行して歩く。

渡辺「どうでした」

武者「8千円になりました」

渡辺「何かありました？」

#### ○フードコート（昼）

テーブルに置かれた渡辺のカメラの映像。

注文の品が出来上がるのを座って待つ武者。

向かいに座る渡辺はカメラの死角で見えない。

武者「これが」

と、ジッポのライターを渡辺に見せる。

武者「純銀かと思ったら、ただのスチールだったんです。だから、値段はつきません、って」

渡辺「あ、じゃあ、2つで8千円」

武者、そうそう、という風に頷く。

× × ×

食事を終え、フードコート内を見回す武者。

× × ×

渡辺のカメラが、少し離れたところに置きっぱなしの女性物のショルダーバッグを撮る。

カメラが武者を撮ると、武者もそのショルダーバッグを見ている。

渡辺「置き引きとかはしないんですか」

武者「（少し考えて）昔、本当にお金がなくて、1回だけやったことがあるんですよ。でも、家に近づくにつれてどんどん心配になってきて、誰かがあとをつけてきてるんじゃないか、部屋に入った途端警察がやってくるんじゃないか、って。だから何となく遠回りして帰ったりして。儲けは大きいんですけど、やっぱりリスクが高いんですよ。みんな見てるし、持ち主だっどこにいるか判んないし」

渡辺「万引きは」

武者「（鼻で笑い）万引きはもう、リスク高いわ儲け少ないわでいいことないです。しかもここそそしてて、かっこ悪いでしょ」

× × ×

ショルダーバッグの持ち主の、若くて美しい女性が恋人と席に戻ってくる。

× × ×

武者「行きましょう」

武者、立ち上がり、トレーを返却する。

武者、フードコートを出て行く中年女性のあとをつける。

渡辺、武者の後方を歩く。

女性は50代後半、脚が悪いようだが歩みは早い。

髪の毛は明るい茶色に染められているが、手入れされておらず汚らしい。

格好も清潔とはいえず、紺のスカートにスタジアムジャンパー。

キャスター付きのショッピングバッグを引いている。

× × ×

中年女性は建物を出る。  
武者もあとについて出る。

× × ×

中年女性、あるアパートへやってくる。  
築50年は経ってる古い平屋のアパート。  
その一室へ、女性は鍵を使おうともせず、施錠されていないドアを開けて入っていく。  
暫くそのアパートを、無表情で見つめる武者。

#### ○マンションB・外廊下（昼）

渡辺の手持ちカメラの映像。  
武者、外廊下を歩きながら、各戸の玄関周りを立ち止まらずに見て回る。  
渡辺、それを後ろからついていく。  
武者、ある玄関前で立ち止まり、表札を指差す。  
渡辺のカメラ、表札にズームする。  
表札に「x」の傷がついている。  
武者、すぐに歩き出す。  
渡辺も続く。

#### ○同・駐車場

武者、歩いてマンションから離れていく。  
渡辺、武者と並行して歩く。  
武者「マーキングですね」  
渡辺「縄張りとかあるんですか」  
武者「そんなの無いんですけどね。でも、ああいうのには、近づかない」

#### ○住宅街・道端（夕方）

渡辺のカメラの映像。  
すっかり辺りは暗くなっている。  
道端に立ち、数十メートル離れた、ある一軒家を見つめる武者。  
家は2階建て、庭付き。  
生け垣で中の様子は判らないが、庭に面した窓の灯りがついていることは知れる。  
渡辺「灯りがついてるじゃないですか」  
武者「それが、ずっとついてるんですよ。ずっとあそこの電気だけついてるんです」

渡辺「誰もいない？」

武者「ほぼ間違いなく誰もいないですね」

× × ×

完全に日が暮れる。

武者「じゃあ、行きます」

と、堂々と正面の門扉から家に入っていく。

武者、すぐに門扉から出てきて、渡辺に近づいてくる。

武者「メガネ忘れちゃった」

渡辺「あ」

渡辺、武者に手持ちカメラを預け、ショルダーバッグからカメラ付きメガネを出す。

× × ×

カメラ付きメガネをかけ、また堂々と門扉から家に侵入していく武者。

○同・一軒家の敷地内

武者のメガネカメラの映像。

武者、玄関に近づき、ドアノブを回すが、鍵がかかっている。

庭へ回る。

リビングの灯りが庭へこぼれている。

武者、庭を見回す。

高い生け垣に完全に囲まれた庭には、幼児用の手押し車やブランコが置いてある。

武者、灯りのついたリビングに寄る。

掃き出し窓にはカーテンが引いてあり、中の様子は伺えない。

武者、庭へ降りて物色する。

花壇からスコップを拾う。

またリビングの窓に寄る。

スコップの先で刺すようにして窓を割る。

○同・道端

渡辺の手持ちカメラの映像。

庭の方から、微かに窓の割れる音がする。

○同・一軒家の敷地内。

武者のメガネカメラの映像。

窓の割れた箇所から手を突っ込み、クレセント錠を回す。

窓を開け、土足で侵入する武者、風に揺れるカーテンを手で払う。

○同・道端

渡辺の手持ちカメラ映像。

武者、門扉から出てきて、渡辺に近づいてくる。

カメラ付きメガネはしていない。

武者「行きましょう」

と、早足で歩き去る。

渡辺も続き、並行して歩く。

足元を見たまま歩き続ける武者。

渡辺「どうでした？」

武者「（少し間を置き、足元を見たまま）誰もいませんでした」

それ以上何も話そうとせず、早足で歩く武者。

### 第3章：取材（3）

---

#### ○武者のアパート・リビング（朝）

渡辺の手持ちカメラが、窓辺に立って外を眺める武者を映す。

外は雨。

渡辺「雨の日は休みですか」

武者「いやいや、雨の日は、外に出ます。傘で隠れますんで」

渡辺「これからどこへ」

武者「『飛び込み営業』します」

渡辺「飛び込み営業？」

武者「独り住まいの人の部屋にいて、鍵の掛け忘れてる部屋を探します」

渡辺「それを『飛び込み営業』っていうんですか」

武者「（少し考えて）ぼくがそういってるだけです」

#### ○マンションC・道端（昼）

同日。

渡辺の手持ちカメラの映像。

マンションCから数十メートル離れた道端に渡辺は立っている。

マンションCの外廊下を歩く武者の姿。

武者はマウンテンパーカーにザックを背負い、ニット帽をかぶっている。

武者、ある部屋の前に立ち止まる。

武者、鍵が閉まっていたらしく、翻って歩き出す。

×      ×      ×

マンションCの方から、傘をさした武者が渡辺の方へ近づいてくる。

武者「閉まってました」

足早に立ち去る武者。

武者についていく渡辺。

#### ○マンションD・道端

渡辺の手持ちカメラの映像。

マンションDから数十メートル離れた道端に渡辺は立っている。

マンションDの、ある部屋の前に立つ武者。

武者、鍵が閉まっていたらしく、翻って歩き出す。

#### ○マンションE・道端

渡辺の手持ちカメラの映像。

マンションEから数十メートル離れた道端に渡辺は立っている。

マンションEの、ある部屋の前に立つ武者。

武者、鍵が閉まっていたらしく、翻って歩き出す。

## ○道

渡辺の手持ちカメラの映像。

歩く武者と、並行して歩く渡辺。

渡辺「根気のいる仕事ですね」

武者、そうなんですよ、という風に微笑む。

## ○マンションF・道端

渡辺の手持ちカメラの映像。

マンションFから数十メートル離れた道端に渡辺は立っている。

マンションFは3階建て。

武者、2階にある目当ての部屋の前に立つ。

鍵が開いていたらしく、武者は渡辺の方を見る。

ドアが開き、武者は部屋の中へ消える。

## ○同・室内

(武者、カメラ付きメガネをかけ、オンレコにする。)

武者のメガネのカメラの映像。

部屋の間取りは2DK。

武者、女性物の靴が何足も置かれた玄関で靴を脱ぎ、キッチンへと踏み入る。

キッチンは3帖、その奥に6帖のリビング。

カーテンは引かれておらず、雨模様の外の光が室内をぼんやり照らす。

きれいに片付いたキッチンの物色は適当にし、リビングへと侵入する。

リビングには、座卓、テレビ、胸の高さの衣装タンス等がある。

衣装タンスの上に、写真やフィギュアが飾られている。

武者「お」

と、何かを発見した模様。

武者、タンスの上から1体、ヒーロー物のソフビフィギュアを丁寧に手に取る。

武者「なぜ、こんなところに……」

武者、タンスの上に財布を発見する。

武者、暫くそれを見つめ、壁掛け時計を見る。

12時17分。

武者、慌てた様子で、ソフビフィギュアをザックの中に入れる。

財布から札（千円しか入っていない）を抜き取り、寝室へ。  
ベッドに並べられたぬいぐるみの中に財布を隠す。

○同・道端

渡辺の手持ちカメラの映像。

渡辺の横を、町工場の事務員姿の女性（30歳前後）が、傘をさして横切っていく。  
寒さに身を強ばらせながら、マンションFの方へ歩いていく。

○同・室内

武者のメガネカメラの映像。

武者、ドアスコープを覗き、外廊下の様子を確認する。

ドアを開けて外に出る。

外廊下には誰もいない。

○同・道端

渡辺の手持ちカメラの映像。

女性事務員、マンションFの階段を上っていく。

武者が部屋から出てくる。

○同・外廊下

武者のメガネカメラの映像。

平静を装い、女性事務員が上ってくる階段へ向かう。

武者、階段を下りようとしたところ、足音が聞こえて、慌てて上へと向かう階段を駆け上がる。

○同・道端

渡辺の手持ちカメラの映像。

慌てて階段を駆け上がる武者の姿。

女性事務員、2階に上がり、外廊下を自分の部屋へと歩いていく。

武者、堂々と階段を下りてくる。そのまま1階へと下りてくる。

× × ×

マンションFから早足で渡辺に近づいてくる武者。

武者「（少し興奮気味に）行きましょう」

と、足早に去る。



○ファストフード店内（昼）

同日。

テーブルに置かれた渡辺のカメラの映像。

ハンバーガーにかじりつく武者。

向かいに座る渡辺はカメラの裏側にいて見えない。

渡辺「何で帰ってくるって判ったんですか」

武者、ハンバーガーを飲み込み、

武者「財布を忘れてたんです。彼女、勤め先が近所だったから、お昼休みに、取りに戻ってくるなって思って」

渡辺「（驚嘆して）へー。あなたすごいわ」

武者「（まんざらでもない様子で）何がですか」

渡辺「できるんじゃないですか、銀行とか」

武者「（笑う）できるわけないですね」

渡辺「（感嘆して）すごいなー」

武者「渡辺さんの方が何百倍もすごいですよ」

渡辺「『渡辺さん』なんてもうやめて下さいよ。『ナベ』でいいですよ、『ナベ』で」

武者、にこやかな表情。

渡辺「武者さんは小さい頃のあだ名はなんですか」

武者「普通に『武者』ですよ。『むしゃむしゃ』とか、『武者コナーズ』とか」

渡辺「（笑う）武者コナーズ……」

武者、つられて笑う。

渡辺「じゃあ、親しみを込めて、『武者くん』でどうですか」

武者「いいですよ、何て呼んでもらっても」

渡辺「武者くん」

武者「（少し間を置いて）渡辺さん」

渡辺「いやいや（笑う）、そこは『ナベ』でしょ」

武者「（照れた感じで）ナベさん」

渡辺「いやいやいやいや（笑う）」

武者「『ナベさん』が限界です（笑う）」

× × ×

武者、ザックから取り出したソフビフィギュアの説明を始める。

武者「これはですね、ボルテージャーといって、テレビのヒーロー物のフィギュアで……」

× × ×

フィギュアの背中を指差しながら、  
武者「ここがリアクターになってて、攻撃されたエネルギーをためるわけです。……」

× × ×

武者「全然人気が出なくて、すぐ終わっちゃったんです」

渡辺「で、いくらするの？」

武者「（少し考えて）50万くらい」

渡辺「50万？ え、（こんなものが、という風に）何で？」

武者「ウルトラマンとかは、欲しい人がいっぱいいるから値段が上がるんだけど、こういうマイナーなのは、欲しい人が、（少し考える）何十人とか、何人とかしかいないんですよ。でも、その何人かは、ものすごくこれが欲しいわけです。ピンポイントでこれが欲しいんです。そういう人たちに競わせれば、びっくりするような高値がつくんです」

渡辺「そういう人が集う、お店みたいなものがあると」

武者「（少し躊躇い）そういうのに詳しい人がいるんです」

渡辺「詳しい人、知り合い？」

武者、表情を変えず、答えない。

渡辺「知り合いなんだ」

武者、凶星だったらしく、渋い表情。

渡辺「ちなみに、何ていう人？」

武者「いやあ（顔を歪め）、それは勘弁して下さい」

渡辺「（ショックを受けたように）え！」

武者「だって、あとで編集するとはいえ、カメラで撮ってるわけだし」

渡辺「そんなに、ヤバい人なの」

武者「（とても言いにくそうに）んー」

渡辺「（水臭いなあ、という風に）武者くん」

武者、話したことを後悔している様子。

渡辺「（腹を括りなさい、という風に）武者くん」

× × ×

渡辺「で、その三井さんからはいくらもらえるの」

武者「ま、（少し考え）2割もらえれば、ってところですかね」

渡辺「でも10万。ひと月分の稼ぎだ」

武者「（いわれてみれば、という風に）まあまあ、そうですね」

渡辺「1回の、1回のだよ？ 1回の仕事で最高いくら稼いだことがあるの」

武者、思い出そうとする。

武者「昔、ある部屋に入ったら、札束が3つ、こう、ばんばんばん、て、置いてあるんですよ」

渡辺「え、3百万？」

武者「でも、そのままにして帰りました」

渡辺「え、何で？」

武者「そんなの、絶対ヤバいもん。何も盗らずに帰りましたよ」

○3ピース（三井の経営するアパレルショップ）・道端（昼）

フィギュアを盗んだ日とは別の日。晴れ。

3ピースは商店街の目抜き通りの一角にある、角地の貸店舗に入っている。

渡辺のカメラの映像。

カメラを持った渡辺は、3ピースの斜め向かいの物陰に立っている（以下、この位置をポイント2とする）。

3ピースの右側には、大通りへと向かう道が見える。

渡辺「じゃあ、これ」

と、武者にカメラ付きメガネを渡す。

武者「勘弁して下さい。ぼくがメガネしてたら絶対に怪しい」

渡辺「じゃあ、これは？」

穴の空いた紙袋に別のビデオカメラが入っている。

武者「見えてるじゃないですか」

× × ×

結局、カメラ付きメガネをかけていくことになった武者、緊張して顔が歪んでいる。

渡辺「大丈夫大丈夫」

武者「（腹を括ったように）行きます」

3ピースへと歩いていく武者。

○同・店内

武者のメガネカメラの映像。

武者、店内に入る。

店舗スペースは24帖程の広さ。

壁は白で、白黒基調の服がゆったりとした間隔で並べられている。

壁に造りつけられた棚には、小物類が陳列されている。

三井、レジカウンターでコードレスフォンを耳に当てている。

三井「はい……はい」

電話中の三井、武者に気づき、手招きする。

三井「いやいや、ご謙遜を」

三井、事務所のドアを指差し武者に入るように促す。

三井「こちらのファックス番号、判りますか」

武者に続き、三井も事務所に入室する。

三井「いえ。こちらこそ……（笑う）何を仰りますやら」

事務所は約8帖、四方の壁に沿ってオフィス用の棚が置かれ、段ボールが積まれている。

真ん中に置かれたテーブルにも段ボールが置かれ、テーブルの下には、中身の詰まった折り畳みの収納ボックスが並んでいる。

武者、椅子に腰掛ける。

三井も椅子を持ってきて、テーブルの斜向いに腰掛ける。

三井、肘で段ボールを押し、テーブルの上にスペースを作ると、メモを取る。

三井「はい……はい……」

武者、ザックの中からソフビフィギュアを取り出し、三井のメモの邪魔にならないように置く。

三井「では、お待ちしてます。……はい、失礼します」

三井、電話を切る。

三井「（おどけた感じで）武者くんじゃないですかー」

三井、電話を切ると、フィギュアには目もくれず、携帯電話を取り出して操作し出す。

武者「お疲れ様です」

三井「めちゃめちゃいいタイミングで来たね。ちょうどいま仕事の電話だった」

店舗の方から、ファックスが届いたことを知らせる電子音が聞こえる。

三井「お、早い」

と、携帯電話をいじりながらファックスを取りに行く。

三井、携帯電話をいじりながら戻ってきて、ファックスを武者に渡す。

三井「住所、これね」

と、さっき取っていたメモをテーブルから取り、武者に渡す。

三井、すぐにまた携帯電話の操作に没頭する。

武者、ファックスを見る。

荒い白黒画像で、石盤が写っている。

× × ×

武者「失礼しまーす」

と、レジカウンターで携帯電話をいじっている三井に声をかけ、店舗のドアを開ける。

三井「武者くん！」

武者、振り返ると、三井がディスプレイされた商品の中からメガネを一つ投げてよこす。

武者、それを上手にキャッチできず、床に落とす。

三井「そのメガネ、似合っていないよ」

武者はメガネを拾い、会釈する。

三井「よろしくー」

と、携帯電話を操作しながら、けだるそうに手を振る。

○同・道端

ポイント2の渡辺の手持ちカメラ映像。

3ピースから出てくる武者。緊張した面持ち。

武者「仕事を頼まれました」

渡辺「それは？」

と、片手に持つメガネを指差す。

武者「もらいました」

渡辺「いい人じゃん」

何も知らない癖に、という落ち込んだ表情で渡辺を見る武者。

武者、一つため息を吐き、歩き出す。

渡辺、あとについていく。

渡辺「フィギュア、いくらだった？」

武者、立ち止まって、

武者「あ」

## 第4章：石盤を盗む

---

### ○マンションK・外廊下（夜）

渡辺の手持ちカメラの映像。

外廊下を歩く武者。

その後方から渡辺がついていく。

武者、消火用のホースが収められたボックスを開ける。

中に3桁のダイヤル式ロックが引っ掛けられている。

×       ×       ×

玄関の鍵を開けて入室する武者。

渡辺も続く。

室内は真っ暗。

武者、ランタン型の電灯をつける。

渡辺のカメラが部屋をぐるっと眺望し、空き部屋であることが判る。

### ○同・ベランダ

渡辺のカメラ映像。

寒風吹きすさぶ4階のベランダ。

寝袋に包まる武者。

渡辺は死角で見えない。

武者の表情は硬く、寒さのせいか緊張のせいか、小刻みに震えている。

ベランダの斜め下に、2階建ての小さなアパートが見える。

武者「あの部屋ですね。2階の右から2つ目」

×       ×       ×

武者「今回は、これを使います」

と、渡辺にバンプキーを見せる。

渡辺「バンプキー」

武者「（心底心配そうに）ちゃんと開いてくれるかなー」

×       ×       ×

渡辺「今回は夜やるんだね」

武者「デリヘル嬢なんで、夜留守になるんです」

渡辺「でもデリヘル嬢って、不規則なイメージがあるけど」

武者「デリヘル嬢は会社員と同じくらい時間にシビアですよ。ま、そうでないところもあるけど。彼女のところはシビアです」

渡辺「知ってる人？」

武者「（照れた様子で）ええ、お世話になったことが」

× × ×

寒さに耐える武者、くしゃみをする。

渡辺「風邪？」

武者「大丈夫です」

鼻をかむ武者。

× × ×

武者、身を乗り出す。

当該の部屋から果野が出てくる。

武者、手袋をめくり、腕時計で時間を確認する。

武者「じゃあ、いきましようか」

渡辺「え、今からいくの？」

武者、部屋の中に入り、手早く寝袋をしまう。

武者「はい」

#### ○果野のアパート・道端

渡辺のカメラの映像。

果野のアパートから約20メートル離れた道端（以下、この位置をポイント3という）。

武者、カメラ付きメガネを掛けている。

武者、緊張した面持ちで頷き、果野のアパートへ向かう。

#### ○果野のアパート・外廊下

武者のメガネカメラの映像。

武者、果野の部屋へ向かいながらバンブーキーをポケットから取り出す。

玄関までやってきて、試しにドアノブを回してみると、ドアが開いている。

#### ○同・室内

武者のメガネカメラの映像。

部屋の間取りは2LDK。

6帖のダイニングキッチン、その奥に6帖のリビング、その左手に6帖の寝室。  
キッチンの手元灯がついている。

冷蔵庫が少し開いていて、中からオレンジ色の光が漏れている。

リビングのテレビがつけっぱなし（外部入力）になっている。

リビングの中は菓子の袋やティッシュや衣類でだらしなく散らかっている。

テーブルの上にピンクの財布が置いてある。

中には千円札が20枚くらい、レシートと一緒に雑多に入っている。

武者、それらを抜き取る。

ひとつ息を吐く武者、焦りが伺える。

寝室へ侵入し、ペンライトの光で部屋の中をぐるっと照らす。

胸の高さくらいのタンスの上に写真が飾られている。友達と写った写真。

その横に目当ての石盤が置かれている。

ペンライトの光が明滅し、消える。

武者が振り向くと、部屋の隅の闇の中に、横に並んだ2つの目が浮かんでいる。

キッチンから漏れた灯りでナイトウォッチャーの輪郭がおぼろげに判る。

武者の息を飲む音。

武者、後ずさりする。

目も距離を保ってついてくる。

リビングへと移り、ナイトウォッチャーがキッチンの手元灯に直に照らされようかという  
タイミングで手元灯が明滅して消える。

武者はリビングからダイニングキッチンへと入る。

依然、ナイトウォッチャーの目は距離を保ったまま武者を見つめている。

手探りしている武者の手に当たり、プラスチックのコップが落ちる（壊れてはいないが、  
何度も地面にあたりやかましい音をたてる）。

武者、玄関までやってきて、2つの目を見つめたまま靴を履く。

ドアに背中をつける。

武者、ドアを開けるとダッシュで外廊下を逃げる。

#### ○同・道端

ポイント3の渡辺の手持ちカメラの映像。

外廊下を走る武者の姿。

武者、階段を駆け下り、そのまま走り続け、渡辺の前を横切っていく。

渡辺「（呼び止めようとして）ちょ……」

と、武者のあとを追って走る。

#### ○武者のアパート・リビング（夜）

同日。



ポイント1の渡辺のカメラの映像。

パソコンの画面でナイトウォッチャーの映像を確認する武者と渡辺。

身を乗り出して画面に食い入り、好奇心むき出しの渡辺。

その横で、ただただ呆然と虚空を見つめる武者。

× × ×

パソコンのタッチパッドを操作して、繰り返し同じ映像を見る渡辺。

その横で、呆然と画面を眺める武者。

× × ×

武者「これは、何ですか」

渡辺「(心底不思議そうに) さあ」

武者「心霊番組とかで、こういうのが映ってたりしないんですか」

渡辺「でも、こんなはっきりとは」

× × ×

画面に食い入る渡辺。

呆然と画面を眺める武者。

× × ×

画面に食い入る渡辺。

武者、ポケットの中から果野の財布から抜き取った札を取り出す。

テーブルの上で、札とレシート類を分別する。

武者「あ……」

札と札の間から免許証が出てくる。

武者「免許証」

と、免許証をじっと見る。

渡辺、首だけ動かして武者の方を見る。

すぐに画面に視線を戻す。

武者「『新妻』だって」

渡辺、首だけ動かして武者の方を見る。

武者「新妻さん。名字が」

と、渡辺に免許証を見せる。

× × ×

武者の携帯電話が鳴る。

ビクッと体を震わす2人。

武者、着信画面を見て渋い顔。

意を決して取る。

武者「はい。……お疲れ様です。はい、はいそうです。……はい、はい、それが、部屋までは行ったんですけど……はい……はい……そうなんです。……はい、申し訳ありません。（三井の怒鳴る声。声が割れている）はい……はい……すいません」

画面から顔を上げ、三井に怒られる武者を横目で見ると渡辺。

× × ×

武者、切った電話をテーブルに置く。

落ち込んだ表情の武者、がっくりと首を垂れる。

渡辺、気の毒そうに武者を横目で見ると。

#### ○果野のアパート・道端（夜）

ポイント3の渡辺の手持ちカメラの映像。

カメラ付きメガネをかけた武者、寒さに身を固めながら果野が出かけるのを待つ。

× × ×

武者「小学校のとき、父親の万年筆をこっそり持ち出して、学校に持ってってみんなに自慢したことがあって。家に帰ったら父親が、万年筆がないないって怒ってて、ぼく、夜、みんなが寝た後に学校に取りにいったことがあるんですよ。で、当然学校、閉まってるわけですよ。1階の窓全部調べて、開いてなくて。で、正面玄関で、屋根が、こう（手を庇のように）、せり出してるじゃないですか。その上に上って、そしたら、窓が一つ開いてたんです。そこから入って、自分の教室に行って、真っ暗のなか自分の机探して、机の中から万年筆とって、また同じ窓から出て、屋根から飛び降りて、家に帰ったんです。そしたら（自嘲して笑いながら）、家の鍵が閉まってるんです。開けて出たのに。だから、そこらへん少し散歩して、物置に隠れて、朝練に行く姉ちゃんが出てった後にこっそり家の中戻って、パジャマに着替えて、布団に入って。そしたら、布団の中がすごいわかいんですよ。もうこっから出て学校に行くなんて考えられないくらい。今日は本当に学校に行きたくないって思ってたなら、本当に風邪引いてたんです。39度8分。未だに自己最高体温ですね」

× × ×

果野の部屋を見つめる武者。

× × ×

武者と渡辺の前を、果野のアパートに向かって高橋と2人の後輩が冗談を言い合いながら横切っていく。

高橋たちが果野の玄関前の外廊下まで来ると、ちょうど果野が部屋から出てくる。

果野、高橋の制止を振り切って仕事へ向かおうとする。

果野にまとわりつく高橋。

その後方から2人の男がへらへらしながらついていく。

アパートの階段を下り、ポイント3の方向へと歩いてくる4人。

果野「しつこい！」

と、まとわりつく高橋を押し返す果野。

高橋、コーンに脚を取られてバランスを崩し、尻餅をつく。

すたすたと歩き出す果野、武者と渡辺の前を通り過ぎる。

高橋が怒気を含んで果野を追いかける。

その後方から2人の後輩、へらへら笑いながらついてくる。

街灯が明滅する。

渡辺「え……」

ナイトウォッチャーが武者と渡辺の前を走りながら横切る。

ナイトウォッチャー、後輩1の両肩を挟むようにつかみ、ハンマー投げのように投げる。

後輩1、塀を越えて民家の庭に落ちる。

ナイトウォッチャー、焦る後輩2の腕をつかみ、投げ飛ばす。

後輩2、道路を10メートルくらい転がる。

高橋「(な)んだテメー！」

ナイトウォッチャー、威勢のいい声を上げる高橋を果野から引きはがし、突き飛ばすようにしてブロック塀に打ちつける。

ブロック塀、崩れる。

どこかで犬が吠える。

果野、そのまま仕事へ向かい、死角へ消える。

渡辺が振り返ると、武者が喧噪を気にしながら、果野のアパートへ向かって早足で歩いている。

○同・外階段

武者のメガネカメラの映像。

武者、小走りで階段を駆け上がる。

外廊下を行き、果野の部屋の前まで来てドアノブを回す。

また開いている。

○同・道端

ポイント3の渡辺の手持ちカメラ。

果野の部屋に入る武者の姿。

暴行現場に集まる野次馬たちの声。

○同・室内

武者のメガネカメラの映像。

部屋の電気は全て消えている。

武者、ペンライトで部屋を照らしながら寝室へと急ぐ。

タンスの上の石盤を手にとると、ペンライトが突然消える。

窓の外を見ると、ベランダにナイトウォッチャーが立っている。

ナイトウォッチャー、武者をじっと見たまま動かない。

武者、ナイトウォッチャーに視線を合わせたまますり足でリビングへ移動する。

ナイトウォッチャー、武者の合わせ鏡のようにリビングの窓までベランダを移動する。

武者、翻って急いで玄関を出る。

武者が屋外に出ると、外廊下の電気が消える。

○同・道端

ポイント3の渡辺の手持ちカメラの映像。

果野のアパートの外廊下の電気が消える。

○同・外廊下

武者のメガネカメラの映像。

武者、慌てて走り出す。

○同・道端

ポイント3の渡辺の手持ちカメラの映像。

果野のアパートの外廊下の電気がつくと、武者はいない。

既に階段を駆け下りて、渡辺とは反対方向へ走る武者。

渡辺、救急車が到着した暴行現場を一瞥して、武者を追いかける。

○武者のアパート・リビング（夜）

同日。

ポイント1の渡辺のカメラの映像。

高橋たちがナイトウォッチャーに暴行される映像が流れるパソコン画面に見入る渡辺。

その横で、呆然と画面を眺める武者。

テーブルの上には石盤が置かれている。

× × ×

画面に食い入る渡辺。

武者、テーブルに置かれた石盤をじっと見つめる。

武者、石盤を手に取り、四方から眺める。

石盤の曲面の一部に注目する武者。

指を引っかけると、ふたが取れる。

渡辺と視線を合わせる武者。

武者、中から紙に包まれた果野の髪の毛を取り出す。

恐る恐る紙を開く。

武者「は！」

武者、中に入っていた髪の毛をつまんで渡辺に見せる。

× × ×

画面に食い入る渡辺。

テーブルには紙が広げられて露になった果野の髪の毛。

石盤の中をのぞく武者。

武者、派手なくしゃみをする。

鼻水が石盤の穴と武者の鼻とで繋がっている。

首だけ動かして武者の方を見る渡辺。

ティッシュで鼻を拭く武者。

× × ×

渡辺の話に真剣な表情で耳を傾ける武者。

渡辺「暗闇に現れるってことは、やっぱり光とか熱に弱いんだよ」

玄関のドアを激しく叩く音。

身を強ばらせる武者。

素早く立ち上がり、玄関のスクープをのぞく。

武者「(ささやき声で) 三井さんだ。早く隠れて」

渡辺「(ささやき声で) え？」

武者、ノートパソコンをたたみ、渡辺を急かす。

渡辺、ノートパソコンを抱えてベッドの下に隠れる。

武者、ドアを開ける。

三井「おい」

と、ずかずかと土足で入ってくる。

後ずさりする武者。

三井の後から、黒のスーツ姿の屈強な男が入ってくる。

男は玄関に立ってまま様子を見ている。

三井「おい、何で持ってこねえんだ」

武者「（怯えて）はい」

三井「盗ったらすぐ持ってこいよ」

と、武者にローキックをいれる。

武者、しゃがみ込む。

武者「（怯えて）すみません」

三井「おい」

武者を足の裏で蹴飛ばす。

部屋の灯りが明滅し、消える。

三井「あ？」

三井の左後方あたりにナイトウォッチャーの目が浮かび、瞬きする。

三井が突き飛ばされ、ガラス障子が割れる音。

スーツの男「（威勢のいい声で）（な）んだあ？」

スーツの男が投げ飛ばされて壁に叩き付けられる音とスーツの男の鈍い声。

部屋の灯りがつく。

床にはのびた三井。

リビングとキッチンの境のガラス障子は、木枠も割れている。

武者、惨状に慌てる。

武者「逃げよう」

と、ベッドの下の渡辺を引っ張り出す。

武者、ザックを手に取り部屋を出る。

渡辺、部屋の様子に啞然としながら、ボストンバッグを手に部屋を出る。

× × ×

気がつき、起き上がる三井。

体の痛みじっと耐える。

三井、テーブルの下に落ちていた石盤を拾う。

三井、首の後ろをさすりながら回復を待つ。

試しに首を起こしてみる。

三井、ポイント1のカメラの存在に気づく。

近づき、カメラを持ち上げる。

#### ○渡辺のアパート・リビング（夜）

同日。

渡辺、窓側から室内を向くようにカメラをセットする（以下、この位置をポイント4という）。

部屋の間取りは2LDK。

リビングは6帖、その向こうに6帖のダイニングキッチンが見える。

リビングの向かって右に、襖を挟んで寝室がある。

所在なさそうにテーブルの前に正座する武者。

渡辺、武者の隣に正座する。

渡辺「あの、（言いにくそうに）自分、これでもう寝るんで。もし良かったら、シャワーとか、使って」

武者「（申し訳なさそうに）ありがとうございます」

渡辺、隣の寝室へ引っ込む。

じっとテーブルを見つめる武者。

#### ○同・リビング（朝）

翌朝。

ポイント4のカメラ映像。

床からむっくりと起き上がる武者。

全く寝たりない様子。

シャワーを浴びる音。

× × ×

座ったまま目を閉じる武者。

シャワーを浴びてすっきりした渡辺が武者の横にどかっと座る。

渡辺、肩を怒らせ、苛ついている様子。

渡辺「（語気強く）武者くん」

武者、薄めを開けて、

武者「（ぼんやりと）はい」

渡辺「このままでいいんですか」

武者、まだ頭が回らない様子。

渡辺「（さっきよりも強い調子で）このままでいいんですか」

× × ×

テーブルをじっと見つめる武者。

その武者を、肩を怒らせて見つめる渡辺。

武者「（小さな声で）でも、どうすれば」

渡辺「調査ですよ」

武者、渡辺の方を見て、

武者「（小さな声で）何の」

渡辺「まず、彼女に会ってみましょう」



## 第5章：新妻果野

---

### ○果野のアパート・道端（昼）

ポイント3の渡辺の手持ちカメラの映像。

果野の部屋の玄関。

足元の石をもてあそぶ武者。

### ○同（夜）

ポイント3の渡辺の手持ちカメラの映像。

果野の部屋を見つめる武者。

渡辺「（独り言のように、苛ついた感じで）帰って来ないな。部屋にいるのかな」

渡辺、部屋の窓が見える位置へとすたすたと歩いていく。

渡辺、振り返る。

武者、とぼとぼとついてくる。

果野の部屋には灯りがついていない。

渡辺「いないな」

武者「（恐る恐る）もう、帰りませんか」

### ○渡辺のアパート・リビング（夜）

同日。

ポイント4のカメラの映像。

テーブルの前で、背筋を伸ばして腕を組んで考え事をする渡辺。

武者、その横で、落ち込んだ表情でテーブルを見つめる。

渡辺「そのデリヘル番号、判る？」

武者「（言いにくそうに）携帯、置いてきちゃったんで」

腕を組んだまま、また考え事に戻る渡辺。

渡辺「名前、覚えてる？ デリヘルの」

武者「（少し考えて）ハピネス……とか、なんとか」

渡辺、すっと立ち上がり、チラシの束を持って戻ってくる。

その中から1枚のチラシを見つける。

渡辺「これ」

と、武者に見せる。

× × ×

電話を掛ける渡辺。

渡辺「……はい。22時に、ホテル・クラウンの前で。……はい。……ええと、身長は小さめで

、ガサツな感じの子が……」

○ホテル・クラウン・道端（夜）

武者の手持ちカメラの映像。

通りの向かいから、ホテル・クラウンのファサードが見える。

カメラ付きメガネをかけた渡辺。

渡辺「じゃあ、ここで待ってて」

渡辺、ホテル。クラウンへと歩いていき、目隠しの間を歩いて見えなくなる。

× × ×

スモークの貼られたSUVがホテルの駐車場に入っていく。

○同・部屋

渡辺のメガネカメラの映像。

部屋の中に入る渡辺とカオリ。

カオリ「じゃあ、シャワー浴びてくるね」

渡辺「んん」

渡辺、カメラ付きメガネをはずし、サイドテーブルに置く。

渡辺、服を脱ぎ、カオリのいる浴室へと入っていく。

カオリ「（笑いながら）えー、やだー、もー」

× × ×

渡辺、ベッドでカオリにフェラチオをされる。

× × ×

渡辺、ベッドでカオリに腕枕をする。

カオリ「（甘えた声で）カメラマンさんなんだー」

渡辺「映像作家だってば」

カオリ「芸能人とか会えるの？」

渡辺「うん、たまにね」

カオリ「えー、いーなー」

渡辺「よくないよ。みんなわがままだし」

○同・道端

武者の手持ちカメラの映像。

渡辺、ホテルから出てきて武者の方へ近づいてくる。

渡辺「(ぶっきらぼうに) 行こか」

武者「どうでした？」

無視する渡辺。

○渡辺のアパート・リビング(夜)

ポイント4のカメラの映像。

テーブルの前に正座する武者と、立ってそれを見下ろす渡辺。

渡辺「(ぶっきらぼうに) 俺、寝るね」

武者「はい、おやすみなさい」

と、三つ指ついて頭を下げる。

○カフェ・ベンチ(昼)

武者の手持ちカメラの映像。

10メートルくらい離れたベンチで、カメラをカフェに向ける武者。

カフェの席に腰掛ける渡辺、メガネをずしている。

カオリ、駆け足でやってくる。

○同・席

テーブルに置いたメガネカメラの映像。

メニューを見るカオリ。

渡辺は死角で見えない。

カオリ「もう頼んだ？」

渡辺「ううん、まだ」

カオリ「何にしようかなー」

× × ×

ストローで飲み物を口に含むカオリ。

渡辺「よくお茶するの？ お客さんと」

カオリ「しないよー。義くんだからだよ」

× × ×

カオリ「おいしー」

と、ケーキを食べる。

× × ×

渡辺「あのさ、カオリちゃんの友達にさ、果野ちゃん、て子いる？」

カオリ「え？（少し不機嫌に）何で？」

渡辺「うん（と、二の句が続かない）」

カオリ「果野が目当てだったんだ」

と、ストローで氷をもてあそぶ。

渡辺「え、知ってるの？」

カオリ「果野が目当てだったの？」

渡辺「いやさ、俺の知り合いに、果野ちゃんに惚れちゃった奴がいてさ」

カオリ「でも果野、彼氏いるよ」

と、ストローで氷をもてあそぶ。

渡辺「へー、そうなんだ」

カオリ「つかポン、強いんだよ。空手2段だって」

渡辺「その果野ちゃんだけどさ」

カオリ「（ふくれて）やっぱ果野が目当てなんじゃん」

渡辺「いやいや俺じゃなくて、俺の知り合いがさ」

カオリ「果野、今いないよ」

渡辺「え？」

カオリ「実家に帰ったんだって」

渡辺「何で」

カオリ「彼氏が怖かったんじゃない？ 武闘派だから」

渡辺「果野ちゃんの実家って……」

カオリ「（怒って）私帰るね」

と、席を立つ。

○同・ベンチ

武者の手持ちカメラの映像。

カオリ、店を出て去っていく。

× × ×

店を出た渡辺、武者の方へ近づいてくる。

渡辺「実家に帰ったって」

武者「（聞こえなかった、という風に）え？」

渡辺、武者に返答せず考え事。

渡辺「（独り言のように）免許証」

武者「え？」

渡辺「免許証あったでしょ。彼女の」

武者「（言にくそうに）でも、部屋に置いてきた」

渡辺「部屋に行こう」

武者、返事をしない。

渡辺「（苛ついた様子で）あ？」

武者「……行きましょう」

渡辺「（当然だろ、という風に）うん」

### ○武者のアパート・リビング（昼）

ポイント1の渡辺のカメラ映像。

荒らされた部屋。

スチール棚は倒れ、ベッドはひっくり返っている。

テーブルは真ん中で割れている。

床には、どこからこんなに、というくらい、足の踏み場もないくらいに物が散乱している

。

本、衣類、割れた食器や鍋、紐状になったトイレットペーパー、ぶちまけられた洗剤類。

壁には赤いスプレーで「死ね」と書かれている。

武者、呆然と立ち尽くす。

その横で、渡辺、同情の視線を武者に投げかける。

散乱した物をゆっくりと拾い始める武者。

× × ×

免許証探しを続ける武者と渡辺。

武者、真っ二つに割られた携帯電話を発見する。

× × ×

渡辺「あった」

免許証を武者に見せる渡辺。

武者「（嫌味含みに）良かったですね」

### ○電車（昼）

渡辺の手持ちカメラの映像。

車窓に景色が流れていく。

4人掛け座席に向かい合って座る武者と渡辺。

新しい携帯電話を箱から出す武者。

× × ×

渡辺「090……」

と、自分の番号を読み上げる。

武者、携帯電話に入力する。

× × ×

武者「今、ナベさんの番号しか入ってないです。ぼくの携帯（苦笑）」

○果野の実家の団地・道端（昼）

名古屋近郊の町の集合住宅地。

渡辺の手持ちカメラの映像。

渡辺「B棟の407号室」

団地の中を進む武者と渡辺。

× × ×

渡辺のカメラは、数十メートル離れたところから、B棟の4階の外廊下を、左から右にゆっくり撮る。

そのうちの一つが開き、果野が出てくる。

果野、ショルダーバッグを肩に掛け、出掛ける様子。

階段を下り、武者と渡辺のいる位置とは反対方向へ歩いていく。

渡辺「ほら」

と、武者を突く。

武者「え？」

渡辺「行って」

武者「（焦って）え、なんて」

渡辺「（舌打ち）もう……」

渡辺、果野に駆け寄る。

渡辺「すみません」

振り向く果野。

渡辺「ちょっと聞きたいんですが」

果野、渡辺と武者に対して怪訝な視線。

渡辺「我々、テレビ番組制作会社の者で、超常現象を取材してるんですが」

果野「おじいちゃんの取材ですか？」

渡辺「おじいちゃん？」

果野、あ、違うんだ、という表情。

渡辺「ちょっと、お話伺えませんか」

果野「（猜疑心むき出しで）なんで私なんですか」

渡辺「それは」

と、答えに窮す。

武者「それは、あなたがかawaiiからです」

と、身を乗り出して言う。

果野、は？ 何言ってるの？ という表情。

武者「テレビ的に……」

と、渡辺に助け舟を請う表情。

渡辺「さっきから中高年の人ばかり取材して、若い女性を入れておかないともたないんです。番組的に」

果野、値踏みするように、ふーん、と頷く。

果野「名刺とかないんですか」

渡辺「実はフリーランスで。名刺作る予算がなくて」

果野、値踏みするように、ふーん、と頷く。

果野「じゃあ、電話番号教えて下さい」

と、バッグから携帯電話を取り出す。

渡辺「あ、はい。（武者に）おい」

武者「はい？」

渡辺「番号」

武者「あ……」

と、慌てて携帯電話をポケットから出す。

武者「090……」

果野、番号を登録する。

果野「名前は何と仰るんですか」

武者「（渋々、小さな声で）武者です」

果野「え？」

武者「武者」

果野「武者？」

武者「武者です」

果野「武者？」

武者「影武者の武者……」

果野の表情から少し警戒感が薄れる。

果野「（携帯電話をいじりながら）武者さんは芸人さんですか」

武者「（質問の意図が判らない、という風に）いや、違いますけど」

果野「なんか見たことある気がしたから」

武者、少し嬉しそう。

渡辺「アシスタントです」

果野「あなたのも」

渡辺「え？」

果野「あなたの番号も教えてください」

渡辺「あ」

と、カメラが揺れ、携帯電話を取り出していることが判る。

渡辺「申し遅れました。私、渡辺です」

果野「（素っ気なく）はい」

渡辺「あの、お名前伺って宜しいですか」

果野「田中です」

と、番号の登録が終わった携帯電話をしまう。

○ファミレス・店内（昼）

テーブルに置かれた渡辺のカメラの映像。

渡辺と武者は死角で見えない。

果野、さっきよりは幾分猜疑心が薄れた様子。

果野「映像作家さんなんですか」

渡辺「はあ、まあ」

果野「名古屋で？」

渡辺「前は東京の制作会社に勤めてました」

果野「へー」

× × ×

果野「芸能人とかに会えるんですか」

渡辺「まあ、多少は」

果野「誰に会ったことがあります？」

渡辺「（少し考えて）高田純次とか」

果野「普段もいい加減なんですか、あの人」

渡辺「いやいや、めちゃめちゃ真面目ですよ」

果野「（笑）そうなんだ」

× × ×



果野、リラックスした口調になっていく。

果野「東京ってどこに住んでたんですか」

渡辺「会社は歌舞伎町にあって」

果野「歌舞伎町！ 私住んでました」

渡辺「え、何年くらい前？」

果野「え、2年とか」

渡辺「あ、俺、勤めてた」

果野「へー、じゃあ会ったことあるかも知れないですね、わたしたち」

× × ×

「超常現象」の説明をする渡辺。

渡辺「(たどたどしく) 黒い人影で、目だけがこう、見える、っていうのが、目撃者の、共通した、あれで」

果野、真剣に聞く。

渡辺「特に、その、中村区辺りでよく目撃されてるんですね」

果野、はっとして、

果野「私、中村区に住んでるんです。今」

渡辺「え、そうなんですか？」

果野「(しみじみと) こんな偶然、あるんですねー」

と、渡辺を見つめる。

渡辺「なぜ今はこちらに？」

果野「おじいちゃんが入院したので、そのお見舞いに。」

と、嘘をついている様子もなく話す。

果野「今からお見舞いに行くところだったんですけど、そしたら、(照れて) あなたが」

渡辺「それは(どういった理由で、いう風に)」

果野「あ、おじいちゃん、ちょっとぼけてて、転んだんです。家から電話があった時もびっくりして。頭を打ったとか骨がどうか」

武者「大丈夫だったんですか」

武者が喋ったことに少し驚いた様子で、

果野「はい。検査で入院してるけど」

武者「良かったですね」

果野「はい。ほんと良かった」

と、嬉しそうに笑う。

果野、少し言いにくそうに、

果野「うちのおじいちゃん、大学の先生だったんです。本も出してるんですよ。おじいちゃん、

民俗学とか文化人類学とかの先生で、南米とかアフリカとか東南アジアとかに研究でよく行ってたんです。よくお土産もらって。その中に、その……（手で形を作りながら）石盤みたいな物もらったことがあるんです。お守りにって。お前を守ってくれるからって。で、（少し考えて）昔の話ですよ、昔の（と、断りを入れて）。当時付き合ってた彼が、ちょっと嫉妬深くて、時々、その（言いにくそうに）私に、その……」

武者「暴力を振るったんですね」

果野「（ちら、と武者を見て）そしたら、（渡辺の方を見て）本当に守ってくれたんです。さっき渡辺さんが言ったみたいな、黒ずくめで、目だけがぱっちりしてて。私最初、そういう人かなって思ったんです」

渡辺「そういう人？」

果野「その、変な格好して、『正義の味方』してる人（苦笑）。でも、東京でも、名古屋でも、それが助けてくれて」

武者「（同情した様子で）じゃあ、今でも暴力を……」

とだけ言い、黙る。

果野、凶星だったらしく、少しうつむく。

果野「（少し気を取り直した様子で）高校の時、さっきの家の前で、彼氏がそれに投げ飛ばされて、救急車で運ばれたことがあるんです。警察とか友達に言っても信じてもらえなくて」

渡辺「おじいちゃんは何て？」

果野、言いにくそうに、

果野「『内緒にしてください』って。『誰にも言うな』って」

○病院・廊下（昼）

渡辺の手持ちカメラの映像。

果野「おじいちゃん！」

と、看護師A（女性）に連れられて病室に戻る途中の長二郎に駆け寄る。

渡辺と武者、後からついていく。

看護師A「ほら、お孫さん来てくれましたよー。良かったですねー」

と、長二郎に話しかける。

長二郎、額にガーゼがあてられている。

長二郎「（苛ついた調子で）虫がいたんだ虫が」

果野「（なだめるように）そう、虫がいたんだ。おじいちゃん虫嫌いだもんね」

長二郎「何も判っとらんのだこいつらは。虫のことを何も判っとらん」

果野「そうだね。でもおじいちゃんの体のこと心配してくれてるんだよ。（看護師Aに）ありがとうございました」

看護師A、にこやかに会釈。

果野「部屋に戻ろうか」

長二郎「（叫んで）だから虫がいたんだ！」

果野「判った判った。じゃあ私が虫がいなくなったかどうか確認してあげるから」  
長二郎、ぶつぶつ言いながら渋々果野に連れられていく。

○同・病室

渡辺の手持ちカメラの映像。

ベッドで眠る長二郎。

その脇に並んで座る果野、武者、渡辺。

看護婦B（女性）が入室してくる。

看護婦B「新妻さん！ 夜寝れなくなっちゃいますよ！」

と、長二郎の肩を揺らす。

果野、立ち上がり、

果野「（長二郎を起こさないように小さな声で）すぐ起こしますから」

看護婦B、仕方ありませんね、という風に一つ息を吐き、退室していく。

長二郎の寝顔を心配そうに見つめる果野。

カメラはサイドテーブルに置かれた写真にズームする。

古い記念写真のようだ。

渡辺「写真、見せてもらっていいですか」

果野、写真立てを取り、渡辺に渡す。

写真には7人の男女が写っている。

前にしゃがんだ2人の中高年の男性、その後ろに横一列に並んだ大学生。

果野、しゃがんだ男性の一人を指差し、

果野「これが祖父です。その隣は共同研究者の板倉さん」

渡辺「板倉さんは今どこで」

果野「研究はやめたみたいです。やめたから喧嘩したのか、喧嘩したからやめたのか知らないですけど、おじいちゃんとは今は仲悪くて。それでも今でも時々会いにくるらしくて。会いにきた後は機嫌が悪くなるってお母さん愚痴ってた」

渡辺「今は何をされてるんですか」

果野「香港で商売を始めたとかで。すごいお金持ちなんだって。家に来る時も、ボディガードみたいな人連れてくるらしいです」

写真の板倉。

長二郎「あいつは泥棒だ」

果野、武者（とカメラ）、長二郎の方を見る。

カメラ、長二郎の枕元へ寄る。

渡辺「長二郎さん、石盤について教えて下さい」

長二郎、不思議そうな目で渡辺を見る。

顔を背け、全く口を開く気のない長二郎。

○3ピース・事務所（昼）

事務所の監視カメラの映像。

三井、武者の部屋から持ち帰ったカメラの映像を見る。

三井、石盤をしげしげと眺める。

× × ×

三井、石盤を洗って洗面所から戻ってくる。

タオルで拭き、箸を使って中まできれいに拭く。

自分の髪の毛を引きちぎり、箸を使って中へ突っ込む。

○病院・エントランスの外（夕方）

果野「これからどうするんですか」

渡辺「果野さんは？」

果野「私はこのまま名古屋へ帰りますけど」

武者「大丈夫なんですか」

果野、不思議そうな顔をして、

果野「何が？」

渡辺「（すぐさま）ぼくたちも名古屋へ帰るんです。良かったら、一緒にどうですか」

果野、嬉しそうに頷く。

○電車（夜）

2人掛けの座席に向かい合う渡辺、武者と果野。

カメラは武者の前の空いた席に置いてある。

渡辺と果野の楽しそうにお喋りする声。

通路側に座った武者、反対側の車窓の景色を眺める。

○3ピース・事務所（夜）

事務所の監視カメラの映像。

パソコン相手にデスクワークする三井。

来客に気付き、テーブルの上に置いてあった石盤を棚の上の段ボールの中に隠す。

× × ×

店舗から、三井、板倉、2人のボディガードが事務所に入ってくる。

板倉、さっきまで三井が腰掛けていた椅子に座る。

三井、ポケットに手を突っ込み、ボディガードの話を聞く。

三井、何のことが判らない、という風に肩をすくめる。  
ボディガード、三井の胸ぐらにつかみかかる。  
照明が明滅し、消える。  
闇の中に2つの目が現れ、ゆっくりとボディガードの方へ近づいていく。  
事務所の照明が回復する。  
三井、さっきと変わらずポケットに手を突っ込んで仁王立ちの姿。  
2人のボディガード、もがきながら床に倒れている。  
板倉、立ち上がった状態で呆然としている。  
板倉、三井に背を向けぬようすり足で部屋を出て行く。  
三井、ポケットに手を突っ込んだまま、ボディガードたちが去るのを見守る。

#### ○駅前のロータリー（夜）

果野「それじゃ」

と、渡辺に手を振る。

渡辺、手を振り返す。

果野「バイバイ」

果野、立ち去る。

渡辺「（興奮気味に）すごいことになってきたねー」

武者、苦笑。

渡辺「（楽しそうに）どうしちゃったのー、武者くん！」

武者、無理矢理笑顔を作る。

#### ○渡辺のアパート・リビング（夜）

ポイント4のカメラの映像。

テーブルの前に座る武者と渡辺。

渡辺、本を読んでいる。

武者、退屈そうに爪を見ている。

渡辺「これだ」

武者、覗き込む。

渡辺「『族の長となった者が代々受け継ぐ石の首飾り』……」

武者「首飾り？」

渡辺「ほら、（とページを指差し）紐で縛って首から掛けるんだ」

黙読する渡辺と武者。

渡辺「『対立する部族の襲撃や災害からの守護者として』……」

黙読する渡辺。

武者、顔は本を向いているが、読んでいない。

渡辺「『現地の言葉で、〈夜を見る者〉と呼ばれている』……」

× × ×

渡辺「OK、整理しよう」

と、興奮気味に話し出す。

武者、興味のある振りをして頷く。

渡辺「果野ちゃんのおじいちゃんは石盤を持って帰ってきた」

武者、頷く。

渡辺「おじいちゃんは孫の安全を思い、彼女の髪の毛を入れてプレゼントした」

武者、頷く。

渡辺「それを、武者くんが盗んだ」

武者、じっとテーブルを見たまま。

渡辺「そして中から彼女の髪の毛を、武者くんが出してしまった」

武者、じっとテーブルを見たまま。

渡辺「その中に武者くんがくしゃみをしてしまったせいで、石盤を守る人は果野ちゃんから武者くんに替わった」

武者、じっとテーブルを見たまま。

渡辺「（力強く）だ、か、ら、あのとき三井から守ってくれたんだ」

武者、じっとテーブルを見たまま。

渡辺「（武者の方を向き）その石盤は、いま、三井が持っている」

○3ピース・道端（夜）

ポイント2の渡辺の手持ちカメラの映像。

灯りのついた3ピースを見る武者、カメラ付きメガネをかけている。

武者「でも、気付いてたら」

渡辺「（苛ついた様子で、小声で）大丈夫だって、気付いてないって。いま武者くんは守られてるんだし」

3ピースの灯りが消え、三井が出てくる。

三井、シャッターを閉める。

店の前の通りを、向かって右へ歩き出し、すぐ左へ折れて商店街と大通りを結ぶ道に入ろうとする。

立ち止まり、商店街の通りの10メートル程先に停めてある黒塗りの自動車を一瞥する。

特に気にした様子もなく、商店街と大通りを結ぶ道を進んでいく。

渡辺「ほら」

武者、促されて三井のあとを追う。

商店街と大通りを結ぶ道に入ってすぐに立ち止まり、渡辺の方を振り返る。

渡辺「（苛ついた様子で、小声で）いけよ……」

## ○商店街と大通りを結ぶ道

武者のメガネカメラの映像。

武者、三井と20メートルくらい後方を歩く。

三井、交差点で左前方に何かを発見したらしく、立ち止まる。

武者も立ち止まる。

三井、そちらへ歩き出し、姿が見えなくなる。

武者、駆け足で交差点へ。

武者、建物の陰からこっそり左前方を覗く。

三井が月極駐車場の前の道に立っている。

駐車場にはガラスが割られた三井のセダン。

その周囲に、20人くらいのチンピラがたむろしている。

三井、煙草に火をつける。

チンピラのうちの一人が三井に気付く。

他のチンピラが威勢よく肩を怒らせながら三井に向かおうとする。

別のチンピラがそれを制す。

三井が煙草を一吐きすると、街灯が明滅し、消える。

チンピラたちが周囲を警戒する。

チンピラたちから見て右手、武者と三井からは左手の方向から、ナイトウォッチャー1がチンピラたちに向かってゆっくりと歩いてくる。

チンピラたちがナイトウォッチャーに気付き、威勢のいい声を出しながら戦闘態勢に入る。

。

ドン、という音がし、もう一体のナイトウォッチャー2が三井の車の屋根に立つ。

チンピラたちは2体のナイトウォッチャーに挟まれた形。

チンピラたち、驚く。

チンピラたち、気を取り直し、屋根のナイトウォッチャーに対して威勢のいい声を上げる。

。

屋根のナイトウォッチャー、おもむろにしゃがみ、近くにいたチンピラの襟首をつかみ、投げる。

道路の上に腰から落ち、鈍い音がする。

チンピラたち、後ずさり。

ナイトウォッチャー1、次々とチンピラを襲い始める。

捕まえては投げ、捕まえては投げる。

ナイトウォッチャー2、車から降り、捕まえては投げ、捕まえては投げる。

チンピラの一人が喧噪から逃げ出し、商店街と大通りを結ぶ道を大通りの方へ走っていく。

。

チンピラ、途中で右に曲がり、建物の陰で見えなくなる。

そのチンピラの叫び声がして、建物の陰から投げ飛ばされたチンピラが横切る。  
建物の陰からナイトウォッチャー3が現れる。  
駐車場ではチンピラ全員のびている。  
三井、煙草を放り、足の裏で消す。  
翻って、元来た道に向かってくる。  
武者、慌てて隠れる。  
三井、隠れた武者の横を通り過ぎ、商店街の方向へ戻っていく。  
3体のナイトウォッチャーも、各々の足取りで武者の横を通り過ぎていく。  
最後尾のナイトウォッチャー、武者の方を一瞥する。

○（戻って）同、道端

ポイント2の渡辺の手持ちのカメラの映像。

三井、商店街と大通りを結ぶ道から商店街の通りに出て、さっき視線を向けた黒塗りの車を見る。

さっきと同じ位置に停めてある車に早足で近づいていく。

車のエンジンがかかる。

3体のナイトウォッチャーが車を素早く囲む。

発車しようとアクセルが踏まれる。

ナイトウォッチャーたちが、力士が前ミツを取るような格好で踏ん張る。

タイヤが煙を上げながら空転する。

車が発車の意志をなくす。

ナイトウォッチャーたち、車を持ち上げる。

三井、ちょうど目の高さになった後部座席の窓をコツコツ叩く。

窓が開き、中の者と話す。

ナイトウォッチャーたちが手を離し、車が落下する。

三井、後部座席に乗り込む。車はゆっくりと発車し、いなくなる。

ナイトウォッチャーたち、ゆっくりと商店街と大通りを結ぶ道へ戻っていく。

渡辺、すぐさまナイトウォッチャーを追って商店街と大通りを結ぶ道へ。

道に入るとナイトウォッチャーは消えている。

渡辺、そのまま進み、武者を捜す。

交差点までくる。

駐車場の惨状が見える。

また道を引き返す。

物陰で膝を抱えて震えている武者を発見する。

○渡辺のアパート・リビング（朝）

ポイント4のカメラの映像。



テーブルの前に正座する果野。

鋭い視線を称える目の脇にアザがある。

ドアが開き、武者と渡辺が帰ってくる。

武者、驚いた表情。

渡辺「え、なんで？」

果野「（静かな調子で）鍵、開いてた」

武者と渡辺、顔を見合わせる。

渡辺「朝飯食べた？」

と、コンビニで買ってきたヨーグルトやパンをテーブルに出す。

武者、立ち尽くし、状況が理解できない様子。

渡辺「昨日電話が掛かってきてさ。彼氏が部屋の前で待ち伏せてるんだって」

果野「（武者の方を見て）一緒に住んでるの？」

渡辺「ううん、泊めてるだけ。大丈夫、明日には出てくから。（武者に）な？」

武者、渋々頷き、

武者「はい」

渡辺「……あ、忘れた」

と、ビニール袋を空にする。

渡辺「ちょっともう一回コンビニ行ってくる」

武者「あ、ぼく行きます」

渡辺、何で？ という表情。

渡辺「いいよ。自分で行くよ。（果野に）すぐ帰ってくるからね」

武者、立ち尽くしたまま所在ない様子。

ゆっくりと音を立てないように果野の隣に座る。

武者、果野の目のアザに気付く。

果野、顔を背ける。

武者、バツが悪そうにうつむく。

果野「（冷静に）返して」

と、平静に武者に顔を向ける。

武者、果野に顔を向ける。

果野「免許証」

武者、暫く考え、テーブル上のパソコンを見る。

○（回想）同・リビング（夜）

ポイント4のカメラの映像。

玄関のドアが開き、果野の陰が見える。

果野、少し逡巡し、入室する。

× × ×

リビングの照明の紐を引っ張り灯りをつけ、テーブルの前にリラックスした格好で座る。

× × ×

シャワーを浴びる音。

× × ×

果野、テーブルの前に座り、髪の毛をタオルで乾かす。

× × ×

果野、ビールを飲む。  
パソコンを開き、電源を入れる。

× × ×

パソコンをいじり、撮りためてあった素材映像を再生する。

× × ×

(モニター画面)

武者のアパート・リビング。

武者「顔は、どうすればいいんですか」

渡辺「いいですよ、そのまま。後でモザイクかけるんで」

× × ×

(渡辺のアパート・リビングに戻る)

身を乗り出してモニター画面に見入る果野。

× × ×

(モニター画面)

マンションK・ベランダ。

渡辺「知ってる人ですか」

武者「（照れた様子で）ええ、お世話になったことが」

渡辺「どうでした」

武者「（にやけながら）かわいい子でしたよ。優しかったし」

× × ×

（渡辺のアパート・リビングに戻る）

身を乗り出してモニター画面に見入る果野。

× × ×

身を乗り出してモニター画面に見入る果野。

激しく声を出す渡辺とカオリのセックスの音声。

× × ×

全てを見終わり、呆然とする果野。

○（戻って）同・リビング

状況を悟る武者。

武者、ザックから免許証を出し、果野に差し出す。

果野、武者からそれを取り、そそくさと財布にしまう。

武者、果野から奪った札の束を差し出す。

果野、財布をショルダーバッグにしまう手を止め、ゆっくりとそれを受け取る。

武者「殴っていいですよ。ぼく、いま守られてないんで」

果野「そういう趣味だったっけ」

武者「（惨めな様子で）いえ」

× × ×

果野「（親身に）真面目に働いたら？」

武者、果野をにらむ。

果野「（怒って）何よ。『デリヘルのくせに』って思ってるんでしょ。人のもの盗むよりずっとましでしょ！」

武者、何も言い返せず、目を逸らす。

武者、立ち上がり、ザックを背負って部屋を出る。

× × ×

果野、バッグを抱え、部屋を出る。

× × ×

渡辺、帰ってくる。

渡辺「あれ」

テーブルに腰掛け、状況を理解しようと努めながら、買ってきたコンドームの箱を袋から出す。

渡辺、ま、いいか、という風にビデオカメラとパソコンを接続する。

## 第6章：3ピース襲撃

---

### ○武者のアパート・リビング（昼）

武者、新品のカメラの電源を入れる。

× × ×

ポイント1にカメラをセッティングする。

× × ×

武者、ベッドを元に戻したり、ゴミを袋にまとめたり、部屋を片付ける。

× × ×

ゴミの中から果野の髪の毛が包まれた紙が出てくる。

× × ×

シャワーを浴びる音。

### ○果野のアパート・道端（昼）

手さげの紙袋に入った、武者のカメラの映像。

高橋の現れるのを待つ武者。

高橋、武者の目の前を歩いて果野の部屋へ向かう。

高橋、果野の部屋のドアを荒っぽく叩く。

高橋、不在と知り、翻って武者の方へとやってくる。

武者、高橋へと近づく。

武者「あの」

高橋、立ち止まらずに歩き続ける。

武者「（高橋のあとを歩きながら）彼女につきまとうのやめてもらえませんか」

高橋、立ち止まり振り返る。

高橋「何だてめえ」

と、武者に歩み寄り、武者を突き飛ばす。

武者、後方へ倒れる。

高橋、歩き去っていく。

○マンションG・外廊下（昼）

手さげの紙袋に入った、武者のカメラの映像。

外廊下を歩く武者。

武者、目的の部屋の前で立ち止まり、ドアノブを回す。

閉まっており、翻ってすぐに歩き出す。

○マンションH・玄関前（昼）

手さげの紙袋に入った、武者のカメラの映像。

武者、玄関のドアノブを回す。

閉まっている。

○マンションI・玄関前（昼）

手さげの紙袋に入った、武者のカメラの映像。

武者、玄関のドアノブを回す。

閉まっている。

主婦「どちら様ですか」

と、2部屋隣のから武者に声を掛けてくる。

武者、びくっと主婦の方を向く。

買い物帰りの主婦が武者の方を見ている。

武者、踵を返し、走り出す。

○歩道（昼）

手さげの紙袋に入った、武者のカメラの映像。

武者、歩きながら息を整える。

とぼとぼと歩く。

武者、泣く。

すれ違う歩行者が武者の顔をちらちら見る。

○武者のアパート・リビング（夕方）

ポイント1のカメラの映像。

ベッドで目覚める武者。

ベッドに腰掛け、意識をクリアにしながら考え事。

武者、すっと立ち上がり、3ピース襲撃の準備を始める。

× × ×

武者、テーブルの上に必要な物を集める。

タオル、ビニール袋、バット、ジッポライター、サラダ油、果野の髪の毛の包まれた紙。

× × ×

武者、テーブルで買い出しする物をメモする。

× × ×

先をビニール袋で包んだバットをザックの中に入れる。

柄の先が少し出てる。

果野の髪の毛はポケットに入れる。

× × ×

武者、床に新聞を敷く。

× × ×

武者、バリカンで自分の髪の毛を切る。

× × ×

渡辺に電話を掛ける。

#### ○渡辺のアパート・リビング（夜）

灯りの消えた誰もいない部屋で、電話のバイブがテーブルを鳴らす。

#### ○（戻って）武者のアパート・リビング（夜）

武者、応答を待つ。

武者「もしもし。武者です」

と、留守番電話に話しかける。

× × ×

武者、カメラ付きメガネをかけ、取れないようにツルにつけた紐同士を後頭部で結ぶ。

ニット帽をかぶる。

ザックを背負い、ポイント1のカメラを取り上げる。

○3ピース・道端（夜）

武者の手持ちカメラの映像。

武者、歩いて3ピースへと向かっていく。

夜も深く、他の店は閉まっており、通行人もほとんどいない。

シャッターの閉まった3ピースの前で立ち止まる。

○渡辺のアパート・リビング（夜）

ポイント4のカメラの映像。

渡辺、リビングの電灯の紐を引っ張って灯りをつける。

寝起きの渡辺、携帯電話をチェックする。

留守番電話を聞く。

渡辺、慌てて服を着て、ポイント4のカメラを取り上げる。

○3ピース・道端（夜）

ポイント2にカメラをセッティングする武者。

武者、カメラ付きメガネをかけている。

×       ×       ×

3ピースの遠景。

武者、3ピースに向かっていく。

手には家屋解体用の巨大なハンマーが握られている。

途中から駆けて勢いをつけ、シャッターにハンマーを打ちあてる。

○同・店舗

店舗の監視カメラ映像。

ガラスが割れる。

もう一発ハンマーが振られ、ハンマーの先が見える。

○同・道端

武者、シャッターをこじ開けて店内に侵入する。

○同・店舗

店舗の監視カメラ映像。

武者、身をねじりながら店舗に侵入。



○同・店舗

武者のメガネカメラの映像。

武者、息を整えながら事務所へのドアへ近づく。

ドアノブを回してみるが、開かない。

武者、助走を取り、ドアへハンマーを打ちつける。

○同・事務所

事務所の監視カメラ映像。

ドアが勢いよく開く。

武者、壁のスイッチを触り事務所の灯りをつけ、事務所に侵入。

○同・道端

ポイント2のカメラ映像。

商店街の居酒屋から出てきた若い男女4人が3ピースの前を通りかかる。

いくらか飲んで気分良さそう。

うち、一人の男1がシャッターの穴を見つけ、

男1「何これ」

と笑う。

女1「すごーい」

男1、携帯を取り出して穴の写真を撮る。

三井のスポーツカーが3ピースの前に停まる。

降車した三井、4人を見遣る。

4人、ビビって後ずさり。

三井、シャッターの穴の中を覗き込む。

○同・事務所

武者のメガネカメラの映像。

武者、石盤を探してテーブルの上の段ボールをあさる。

○同・事務所

事務所の監視カメラの映像。

石盤を探す武者。

○同・道端

店舗に入り、事務所の様子を見遣る三井の背中が、穴の向こうに見える。

若い男女4人、ビビりながらもその場を離れない。

男1、携帯電話のカメラを構えたまま。

○同・店舗

店舗の監視カメラの映像。  
事務所の様子を見遣る三井。

○同・道端

三井「（親しげに）武者くんじゃないですかー」

○同・事務所

事務所の監視カメラの映像。  
三井の方を振り向く武者。

○同・事務所

武者のメガネカメラの映像。  
店舗に立っている三井のシルエットが見える

○同・事務所

事務所の監視カメラの映像。  
武者、三井から目を離さないようにしてザックを下ろす。  
ザックからバットを引き抜く。  
バットの先に引っかかったビニール袋を取ると、バットの先にタオルが巻いてある。  
タオルにはサラダ油が染みている。

○同・事務所

武者のメガネカメラの映像。  
武者、ライターを取り出し、バットの先に火をつける。  
事務所の灯りが明滅する。

○同・事務所

事務所の監視カメラの映像。  
事務所の灯りが明滅し、消える。

○同・事務所

武者のメガネカメラの映像。  
武者、とっさにバットを構え、周囲を見渡す。

○同・事務所

事務所の監視カメラの映像。  
武者、バットを構え、周囲を見渡す。

○同・事務所

武者のメガネカメラの映像。  
武者、バットを構え、周囲を見渡す。

○同・事務所

事務所の監視カメラの映像。  
武者の背後に2つの目が開かれる。

○同・事務所

武者のメガネカメラの映像。  
武者、気配を感じ、当てずっぽうでバットを振る。

○同・事務所

事務所の監視カメラの映像。  
バットは棚に当たり、上部に置いてあった段ボールが落ちてくる。  
中に入っていた石盤が転げ出る。

○同・店舗

店舗の監視カメラの映像。  
立ったままの三井。

○同・事務所

事務所の監視カメラの映像。  
武者、石盤に気付き、近づく。

○同・店舗

店舗の監視カメラの映像。  
三井の背筋が少し伸びる。

○同・事務所

武者のメガネカメラの映像。  
武者、石盤に手を伸ばす。

○同・事務所

事務所の監視カメラの映像。

石盤を拾おうと屈んだ武者の後方に、2つの目が現れる。

更に、いくつもの目が、マシンガンの銃弾で壁に穴があくように次々と開かれていく。

#### ○同・事務所

武者のメガネカメラの映像。

武者、石盤をつかむ。

武者の体が浮く。

武者「（怯えて）ああ……」

#### ○同・道端

渡辺の手持ちカメラの映像

息を切らしながら走る渡辺。

道を曲がり、商店街の3ピースの通りに入る。

女性の叫び声がして、3ピースから武者が投げ飛ばされて道に転がる。

武者、石盤を抱え、体を引きずりながら商店街と大通りを結ぶ道へ入っていく。

三井、3ピースから出てきて、ゆっくりとした足取りで武者を追う。

渡辺、3ピースに向かって駆け出す。

渡辺、3ピースに近づくにつれ、その壊れように足取りが重くなる。

激しく破壊された3ピースのファサード。

4人の若者が呆然と立っている。

うちの男2が警察に電話をかけている。

渡辺のカメラが商店街と大通りを結ぶ道を向く。

大通りへ逃げる武者と、少し足早になった三井の後ろ姿が見える。

#### ○商店街と大通りを結ぶ道

武者のメガネカメラの映像。

息を切らしながら逃げる武者。

振り返ると、三井が歩きながら追いかけてくるのが見える。

#### ○3ピース・道端

ポイント2のカメラの映像。

2人の制服警官が徒歩で現れる。

警官1、4人の若者に話しかける。

男1、商店街と大通りを結ぶ道を指差す。

警官1、商店街と大通りを結ぶ道へ向かう。

警官2、無線で本部に報告をする。

○商店街と大通りを結ぶ道

武者のメガネカメラの映像。

月極駐車場の交差点を過ぎ、大通りまで30メートルくらいの位置。

武者、周囲を見回す。

街灯の陰になった闇に、両の目が開かれ、ナイトウォッチャーが姿を現す。

また別の方向を見ると、物陰に目が現れ、ナイトウォッチャーが姿を現す。

○商店街と大通りを結ぶ道

渡辺の手持ちカメラの映像。

大通りへと逃げる武者の周囲に何体ものナイトウォッチャーが現れる。

上部を見るとビルの屋上から、見下ろすように目がいくつも現れ、ナイトウォッチャーたちが飛び降りてくる。

○商店街と大通りを結ぶ道

武者のメガネカメラの映像。

武者の周りにぞろぞろ集まるナイトウォッチャーたち。

武者、痛みをこらえて大通りへと駆け出す。

○商店街と大通りを結ぶ道

渡辺の手持ちカメラの映像。

駆け出す武者を追いかけるナイトウォッチャーたち。

武者、そのまま大通りの車道を横切っていく。

激しいクラクション。

○大通り

武者のメガネカメラの映像。

武者、大通りを行き交う車の間を縫い、反対側へと渡りきる。

後方で、ナイトウォッチャーと通行車が次々と衝突する音。

○大通り

渡辺の手持ちカメラの映像。

ナイトウォッチャーと通行車が次々と衝突していく。

集団の後方にいて無事だったナイトウォッチャーは、ゆっくりとした足取りで、停車した車を乗り越えて、大通りの反対側へ渡ろうとする。

○大通り

武者のメガネカメラの映像。

武者、倒れ込むように生け垣の陰に隠れる。

武者、痛みに耐えながら、ポケットから、長さ約5センチの、新聞紙に包まれた自分の髪の毛を取り出す。

手には血糊がべったりついている。

## ○大通り

渡辺の手持ちカメラの映像。

大通りでは何台かの車が、ボンネットから煙を出して停車している。

ナイトウォッチャーの姿はない。

呆然と大通りへ近づいていく渡辺。

商店街と大通りを結ぶ道の終点で立ち止まり、大通りの惨状を見渡す。

は、と気づき、カメラが左を向く。

ほんの2メートル横に三井が立っている。

三井、呆然と大通りの様子を眺める。

三井、渡辺の存在に気づき、渡辺の方を向く。

三井「何だ？」

警官1「おい！ お前たち！」

と、商店街の方から声がする。

三井と渡辺、そちらへ顔を向ける。

警官1が30メートルくらい先からのしのしと歩いてくる。

三井「面倒くせえ……」

三井の後方の物陰に、目が2つ現れる。

ゆっくりとナイトウォッチャーが姿を現すと、三井の方へ近づいてくる。

ナイトウォッチャー、後ろから三井の肩をつかむと、商店街の方へ投げ飛ばす。

三井「あー！」

と、脚から落下するまで叫ぶ。

警官1、身悶えする三井を見て駆け寄る。

息があるのを確認すると、渡辺の方へ近づいてくる。

警官1「何やってんだー！」

パトカーのサイレンが聞こえる。

渡辺のすぐ横に立つナイトウォッチャー、渡辺をじっと見下ろす。

渡辺、息をのんで動けない。

ナイトウォッチャー、警官の方へ視線を向けると、早足で向かってくる警官に向かって駆け出す。

ナイトウォッチャー、警官の胸ぐらをつかみ、壁際に積んであったビールケースに向かって突き飛ばす。

渡辺「あー！」

渡辺、大通りの反対側へカメラを向ける。

渡辺に向かって立っている武者。

パトカーのサイレンがどんどん近づいてくる。

○大通り

武者のメガネカメラの映像。

通りの向こうで、武者の方を見てカメラを手にしている渡辺。

○大通り

渡辺の手持ちカメラの映像。

通りの向こうの武者、やあ、という感じで手を挙げる。

通りにパトカーがやってくる。

更に1台、もう1台と、パトカーがやってきては中から警官が出てくる。

武者、渡辺に向かって歩き出す。

○大通り

武者のメガネカメラの映像。

パトカーのヘッドライトを浴びながら、大通りを横切る。

警官3「ちょっと君、待ちなさい」

と、武者の肩に手をかける。

警官3、後方から引っ張られるようにして後ろに引き倒される。

周囲の警官が騒然とする。

警官4「動くんじゃない！」

警官5「囲め囲め！」

1台のパトカーがグラ、と動き、警官たちがざわつく。

そのパトカーが、ホットケーキをひっくり返すようにその場でくるっと逆さまになる。

その周囲で殺気立つ警官たち、叫び声と共に何人か投げ飛ばされる。

もう1台のパトカーが派手に投げ飛ばされる。

いよいよ周囲が騒然としてくる。

(それらの様子はヘッドライトが眩しくて詳しくは見えない。破壊音や、叫び声が響いている)

武者、ナイトウォッチャーが暴れている方を向き、

武者「(力なく) 待って」

○大通り

渡辺の手持ちカメラの映像。

パトカーが1台ひっくり返り、何人かの警官が投げ飛ばされ、別のパトカーが投げ飛ばされる。

(ここからも、ナイトウォッチャーの姿ははっきりとは見えない)

武者「待って！」

と、叫ぶ。

武者、道の真ん中に両膝をついてしゃがみ、石盤のふたを開ける。

ポケットから果野の髪の毛を出そうとする。

警官6「動くなー！」

渡辺「撃たないで！ 撃たないで！」

と、警官に向かって叫ぶ。

### ○大通り

武者のメガネカメラの映像。

武者、石盤を振り、自分の髪の毛を包んだ新聞紙を出す。

果野の髪の毛を包んだ紙を石盤の中に入れる。

石盤にふたをして地面に置き、両手を上げてヘッドライトの方を見る。

### ○大通り

渡辺の手持ちカメラの映像。

武者、石盤を地面に置き、両手を上げる。

地面に伏せ、手を頭の後ろに組む。

警官が駆け寄り、武者を逮捕する。

渡辺、その様子をじっとカメラで捉える。

渡辺、後ろから突然取り押さえられ、映像が切れる。



## 第7章：エピローグ

---

### ○刑務所・駐車場（昼）

夏。強烈な日照りの中、蝉がやかましい鳴き声が響く。

駐車場に停めた車の脇に置かれた渡辺のカメラの映像。

刑務所のエントランスが見える。

武者、ザックと紙袋を持ってエントランスから出てくる。

短い髪の毛は清潔に整えられ、白いTシャツ、カーキのカーゴパンツ姿。

まっすぐ車の方へ寄ってくる。

渡辺、数歩進んで彼を迎える。

武者、我慢できずにこぼれたような笑顔。

渡辺、手を差し出す。

握手を交わす2人。

暫くもじもじした様子で対峙する2人。

武者「車、買ったの？」

渡辺「うん」

嬉しそうに微笑む武者。

渡辺「昨日、納車だったんだ」

武者「昨日？」

武者、笑う。

### ○渡辺の車・車内

走る車の車内。

渡辺「え、いつ行くの？」

と、運転する渡辺。

武者「えっと、来週の土日のどちらか」

助手席に座る武者。

渡辺「じゃあそれまでうちに泊まれば」

武者「（照れて）いいよ。実家に泊まるよ」

### ○ファミレス（昼）

テーブルに置かれたカメラの映像。

窓際の4人掛けの席に向かい合って座る武者と渡辺。

注文の品を待つ武者。

その向かいに座る渡辺は死角で見えない。

渡辺「実は今度、結婚することになったんだ」

武者「ほんと？」

と、自分のことのように嬉しそう。

渡辺「実は子どもも」

武者、嬉しくて笑う。

武者「え、誰と？」

渡辺「それが、中学の同級生なんだ」

武者「……っへー……」

と腹の底から驚いている。

× × ×

食事が終わり、コップを回しながら氷をもてあそぶ武者。

武者「彼女は、どうしてます？」

と、聞きにくそうに敬語で切り出す。

渡辺「東京に行ったとかで」

武者、コップを見つめたまま、へー、という風に相槌を打つ。

渡辺「映像関係の専門学校に通ってるみたい」

武者「映像関係……」

武者の後ろの席に座っていた果野が、半身だけこちらを向き、渡辺に目配せする。

武者は気付いていない。

× × ×

武者、神妙な面持ちでコップを見つめる。

果野、心配そうな面持ちで武者を見つめる。

果野、吹っ切れた表情で、武者の方を向いて立ち上がる。

武者、吹っ切れた表情で渡辺の方へ顔を上げる。

武者、渡辺の視線に気づき、振り返る。

○クレジットタイトル